家庭雜誌

第參拾四號

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 垣田純朗
編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

社告

家庭雜誌は凡て前金に非されば發送せず、見本は郵劵五錢五厘にて呈す、郵便爲替の拂渡局は芝口支局、本誌代價の郵劵代用は爲替局の無き地に限り可成五厘切手にて一割増

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價

	一冊	半年(十二冊)	一年(廿四冊)
	金五錢	前金五十錢	同金一圓
郵税地方共	金五錢五厘	金五十六錢	金一圓四十二錢

○廣告料一行(廿四字詰)一回ニ付金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

◎◎牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

此スコツト乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滯リナク容易ニ服用シ得ル樣ニ調化シアルモノナリ

◎筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコツト乳菓肺病、瘰癧、精神疲勞、小兒ノ衰弱症及慢性ノ咳嗽ヲ治スルニ最好最良ノ調劑トシテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞賛措カザル處ナリ

◎龍動スコツト及バウン謹製

日本一手特約販賣所

横濱廿八番　米國貿易商會
神戸十七番

◎賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配劑ナル

スコツト乳菓

民友社發兌銷夏書目

夏の日は來れり、綠蔭沙邊に坐して、長天大海を睥睨する處、山莊水亭に臥して、蟬聲流水を靜聽する處、利益と快樂とを以て、必ず好伴侶たらんものは本社發兌の銷夏書籍に如くはなし、請ふ把つて身邊に置け、

德富猪一郎著　久保田米僊畫

四版 誕生日

定價十五錢　郵稅二錢

詩あり、歌あり、語あり、句あり、美麗なる挿畫あり、父母親戚朋友弟妹の手蹟帖として、清潔高美なる家族の間に、薰風の吹て、紗窓に入るが如く、幸福、和樂、融情、平康の福音を齎すものは則ち是れ、

櫻痴居士　福地源一郎著

三版 幕府衰亡論

定價卅五錢　郵稅六錢

其の論は宛轉雄渾、其の文は雍容豐富、其の事は則ち實地目擊の所、歷史の快味は斯の如き好著に依つて知らるべきなり、

ヴヰクトル、ユーゴー著　森田思軒譯

再版 懷舊

定價貳拾錢　郵稅四錢

ユーゴーの文は豪宕徹底、思軒居士の譯筆、神驚鬼哭、忽ちにして黑風、忽ちにして白雨、讀過一番腋下涼冷を覺ふ、讀んで必ず眞味を知れ、

湖處子宮崎八百吉著

十二版 歸省

定價拾五錢　郵稅四錢

忽ち深林の中に明月を賞し、忽ち幽邃の境に哲理を考へ、忽ち紗窓の下に愛人と語る、人生の得意思ふべきなり、其の純雅鮮淨の文字を誦するに至つては、北海の堅氷を嚙むの感あり、

德富健次郎纂輯

再版 近古歐米 歷史之片影

定價貳拾錢　郵稅四錢

本書を讀むは、猶ほ江邊雨霽るゝ時の如し。烟嵐稍ゝ稀微にして、岸樹現はれ、蓬戶出で、帆檣露はれ。遠山浮び、棹歌來り漁舟去る。忽にして英雄、忽にして名士、忽にして風流、忽にして戰爭、忽にして都會、忽にして村邑、或は學術、或は政治。

德富猪一郎著

四版 國民叢書 文學斷片

定價拾五錢　郵稅四錢

長江大河、浩々蕩々として、中に鯉魚を棲ましむるものは、長篇を云ふ也。靜溪潺湲、野花點綴、中に香魚の游泳を數ふるは、短篇を指す也。香魚を釣る、最も快、鯉魚を掣するは更に快更に雄。避暑休課の士、何ぞ奮て此快遊を試みざる。

新刊銷夏書籍發賣

德富猪一郎著

國民叢書第六冊

天然と人

定價二十錢　郵稅四錢

本書題して「天然と人」と云ふ、是れ民友子が總ての人事と天然とに關する雜記隨筆類を輯錄したるものにして、旅行記あり（譬へば阿蘇の煙、東海道中記の如き）、通信文あり（譬へば熱海だより、逗子だよりの如き）、書簡文あり（譬へば總撰擧夢の跡の如き）あり、其の他あり。而して是皆な不用意の文字に得而かも亦赤心の觀察に出で、同情の具念に發したるものなれば、其天眞流露して、恰も空山に水流れ花開くるが如く、神味の悠然たるものあると同時に其觀察精到深至、能く事物の眞を穿ち人情の根底に達し、人をして肉飛び眉躍るの感あらしむ。故に風景を寫しては、乍ち几邊に山聳へ川流れ、風土を叙しては、眼前突として乍ち農家、漁村、野翁、村嫗、桑麻、稻田、春祝、秋祭の狀を見、人情、風俗、生活、其の現在、其の未來、其の過去、或は有形、或は無形、物として具らざるはなく、事として悉さゞるは無きを見る、其の他古跡を尋ねては、則ち歷史の因緣に遡り、校舍を音づれては、則ち兒童の性情を稽へ、或は人物論となり、或は名地策となり、詩歌となり、逸事となり、朋友となり、故鄕となり、變化百端、趣味滿溢、一々指陳すべからず。若夫れ一大活劇たる帝國議會の光景（特別なる）を描すの手腕に至ては、吾人の呶々を要せず、思軒居士の言之を證して餘りあり曰く、「見て國民の解散の光景に至て覺へず目爛肉動くユーゴー隨見錄の議會の事を記するも亦た之より加ふる能はず云々」然らば知るべきのみ、此書を讀むは、それ猶ほ江山清風の邊に臥しながら、耳に社會の遐聞を聽き、目に天下の活劇を見るが如くならんのみ、世豈に斯の如き快事あらんや、世豈に斯の如き消夏法あらんや、若し之を得んと欲する人は只此書を讀んで得よ、只此書を讀んで得よ。

十二文豪號外

内田不知庵著

ジヨンソン

肖像入

定價廿錢　郵稅四錢

日本今日の文明は、十九世紀の形を有すれども、其實十八世紀を繰り返へしつゝある也。殊に今の我文學社會は、十八世紀の英國文學に類似せる跡多し。故に今日の價値を知らんと欲せば、先づ十八世紀の英國文學を知らざる可からず。十八世紀英國文學の巨人たる「ジヨンソン」を知らんと欲する者は、十八世紀の英國文學を知「ジヨンソン」を知らざる可からず。十八世紀の英國文學を振興せし者は、渠れ「ジヨンソン

ソン」也。近世操觚者の祖先は、渠れ「ヂョンソン」也。カアライルの所謂「操觚者としての英雄」は、渠れ「ヂョンソン」也。虛僞浮華の中央に立ちて、「眞」を以て「誠」を以て生命となせる金剛神は、渠れ「ヂョンソン」也。十八世紀の英國が渠に依て一代の風雲を作りし如く、今日の我文學社會は實に「ヂョンソン」を要す、ヂョンソンの謹嚴と剛直を要す。是れ本書の出づる所以也。

本書は僅にヂョンソンの文學を批評せずして、專ら「ヂョンソン」其人の行狀を傳ふるを旨とす。尤も面白く且敎訓に富むものは、著者の文字よりも著者其人にあれば也。其の果してよく十八世紀文學の巨人たる「眞誠男子」「硬骨文豪」ヂョンソンの一生を傳へ得て昭々たるや否やは讀者諸君の判斷に任せん

櫻洲山人中井弘題辭
英國現總理大臣ローズベリー伯著
高木信威纂譯

ピット

精訂鮮麗の肖像を添ふ

紙數凡二百四十頁
定價廿錢
郵稅四錢

原著者ローズベリー伯小傳及肖像を附す

目錄◎第一、ピット何人ぞ○第二、其少時○第三、シェルボルン及聯立內閣○第四、少年宰相○第五、ピット內閣の初年○第六、ウヲーレン、ヘスチングと攝政職○第七、外政○第八、佛國革命の影○第九、戰爭大臣たるピット○第十、內治○第十一、愛爾蘭○第十二、政府顚覆○第十三、最後○第十四、ピットの人物及地位

◎一代の風雲は、一時の事のみ。百年の大計は、百年に止まらず。萬世の眞理を闡明して、之を一國の政事に施く、康民集議の政躰以來、未曾有の長期內閣を持續したる、彼の平和的大宰相、少ウヰリアム、ピットを看ずや。

◎原著者はピットの族に出づ、即英國現內閣總理大臣伯爵ローズベリー卿、其人なり。其著『ピット』は、『評論之評論』主筆ステッド氏の稱讚して、『明晰、光透、勁健、快暢の雄文』と爲す所、而かも一世の自抱を傾瀉して、此一書に盡くすを知らずや。

◎第六議會の當初に於ける、我が內閣首相伊藤伯の演說は、條約改正、英國との交涉は、最も重大の關係あることを告白せり。而して此衝に當れる英國の大宰相は則原著者其人にあらずや。

◎本書題して『ピット』と云ふ、實は其閱歷、事業、議院の動靜、列國の形勢及史上の關係を語るに止まらず。著者胸底の秘密を吐くもの、其識度、其經畧、十八世紀の一偉人を藉りて、之を十九世紀の末年に述ぶ、我國の有志者たるもの、奚むぞ一讀せざるを得むや。

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

明治二十七年七月廿五日發行
家庭雜誌第參拾四號

目録



家庭雜誌第參拾四號

(明治二十七年七月廿五日發兌)

社説

避暑の出來ざる人に向て避暑の方法を示す

本年の暑氣は、近來に例しなき酷烈なりと、老人もつぶやけり、壯年も惱めり、小兒も苦しめり。之を我身に驗するに、實に比類なき暑さと云はざるを得ず。

されば何人も、一家相携へて、山深く雲冷かなる仙郷に遊び、潮青く砂白き清地に行き。以て此の炎暑を避け、以て一年中の安息を得ると、此上もなき人生の至樂なる可し。

されども斯る願ひありつゝも、此の願を實際に果たすもの、幾何もなかる可し。何となれば人として差支なきはなく、家として差支なきはなく、人事意の如くならざるもの、恒に十の八九なればなり。

されば『謂ふまじと思へど今日の暑さかな』とつぶやきつゝ、不本意の中に、一日一日と蒸し殺すが如き、熱鬧なる家屋の裡に宛轉するもの、世間多くの人、皆な然らむ。

吾人は避暑の出來ざる人に向て、その出來得る限りに於て、避暑の方法を示さんと欲す。

その(第一)は早起なり、世には夏の晨た程、快樂なるはなし。如何に牽牛花の一輪二輪、籬の邊に夢の如く咲きたるを見る心地好さを思はずや。炎熱の本體たる驕陽は、未だ雲の衾の中に眠りて起き出でぬなり。清き、涼しき、而して冷かならぬ愛らしき風は、ソヨ〱と袂を吹くなり。

(第二)は清潔てふとなり。清潔とは、身體を清潔にす

るとなり。食物を清潔にするとなり。衣服を清潔にするとなり。室内を清潔にするとなり。

清潔と華麗とは、決して同一の物にあらず、清潔とは不潔ならぬを云ひ、其の實躰の自然を失はず、本質を失はず、その天眞の儘なるを謂ふ。されば垢附きたる錦襴の外套よりも、洗濯したる阿波縮の浴衣こそ、清潔と云はざるを得ず。塵芥堆かき、大理石や、花崗石の建築よりも、拭き上げたる、掃き上げたる杉丸太の家こそ、清潔と云はざるを得ず。腐敗したる西洋料理、若しくは會席料理よりも、立派に精げ上げたる麥飯、烹立てたるまゝの味噌汁こそ、清潔と云はざるを得ず。

清潔なれば、自から涼しくなるなり、而して何人にても、身分相應に早起きと、清潔とは、出來得ることなり。則ち百人は百人、千人は千人、萬人は萬人出來得るとなり。故に吾人は先つ此の二個の避暑法を示す也。

(第三)は心理的避暑也。此れは別段面倒なることにあらず。昔し曹操てふ大將あり、大軍を率ひて遠征したるに、その士卒水に渴したれば、曹操鞭を揚げて、前林を指して曰く、彼處に梅林あり。梅子累々たり。採て以て渴を醫す可しと。此の言を聞くや、士卒皆な口中に津液を生じ、覺へず渴を療したりと云へり。

白雪の峰に降り積りたる富士山を見れば、夏尙ほ寒きを覺へ、納涼の圖を見れば、冬尙ほ肩脫かんと思ふ。熱も冷も、その多くの部分は、心より生ずるものなるを知らば、心にてくよ／＼暑さをかこたんよりも、寧ろ心平かに氣和らかく、清涼の天地を想像して、自から慰むるこそよけれ。

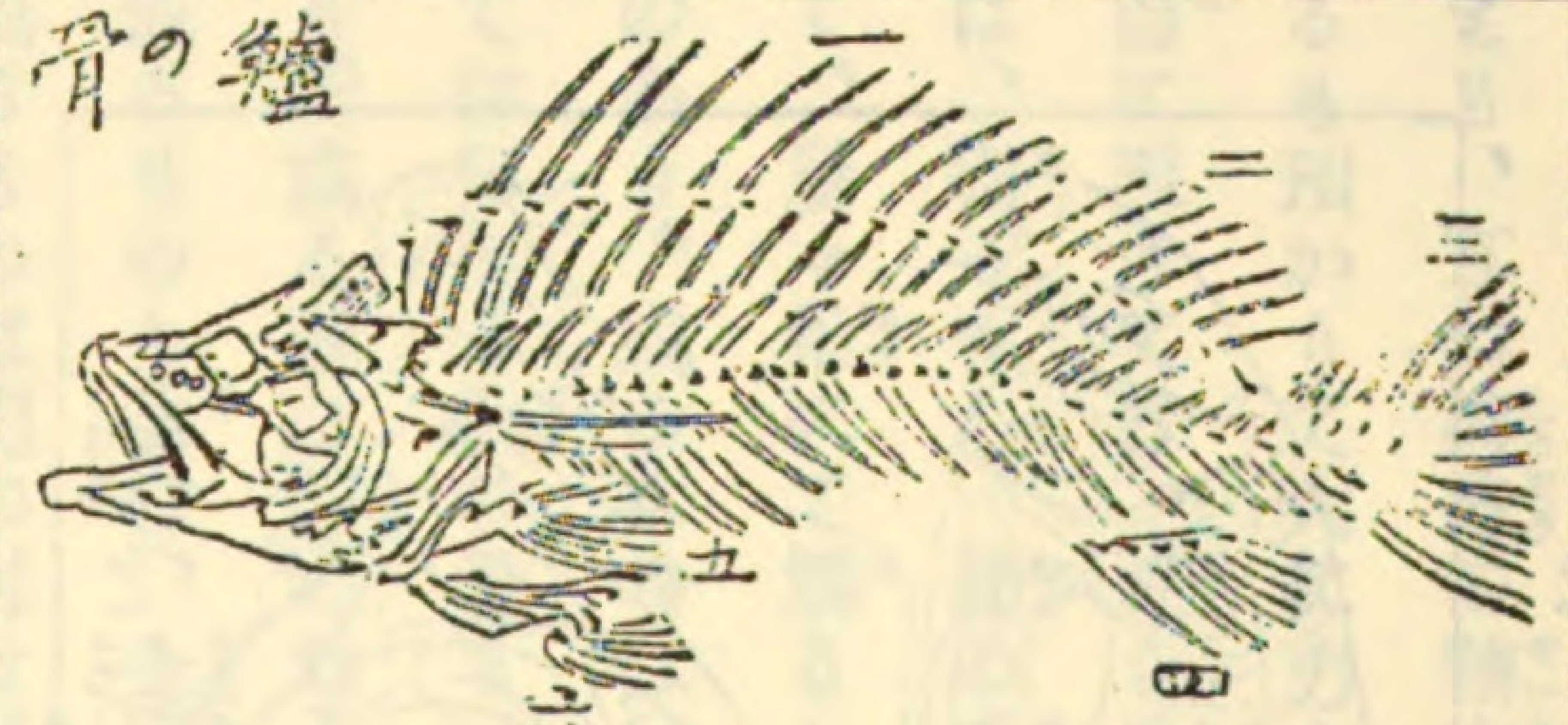
住めば都とは、則ち此の意味なり。我が一心の作用にては、地獄の底も、極樂世界となるぞかし。まして區々の炎暑をや。

科學

海濱の快樂　其四

食膳に並べられたる種々の食物中にて、木の葉に似て美味なる肉あり。屋根の瓦の如き鱗を以て、體の全面を覆ひ、頸は殆どなくして、不つり合に大ひなる口を有し、我等が解剖術を學ばんとするに、最も手近かき試験器械として供なへらるゝものは、誰れもその魚なるを知らん。

印度には平頭ハサルスと稱する魚類ありて、無數の大群を作りて、陸上を行列し、カロライナ地方には平地を歩むのみならず、木の上にまで登る魚ありと云へども、こは例の外にして、我等食卓に上る通常の魚は、皆水中にのみ生育す、その色に至りては、實に著しく異りたるものあり。金の如きもの、銀色のもの、目ばゆき色、黒きもの青、緑、暗赤色、等一々その色を異にせり。たゞその體に至りては、何れも水中を遊泳浮沈するに適せざるはなし。人にすれば手足、鳥にすれば羽翼とも云ふべき役目を爲すものを、魚にありては鰭と云ふ。鰭は蝙蝠傘もしくば扇の如く、骨子に皮を以てひゝと取れり、通常背と尾と、腹部と、脇腹とにあり。各々その場所によりて名を異にせるが第一圖の一、二、三、四の四ッの鰭を以ては舟の櫂の働を爲して、身を前進するを務とめ、五、六の鰭は舵の役を爲して、魚の進むべき方向を定だむかゝる單純なる器械を以て、走とその速やかなるは實に驚くべきものなり。

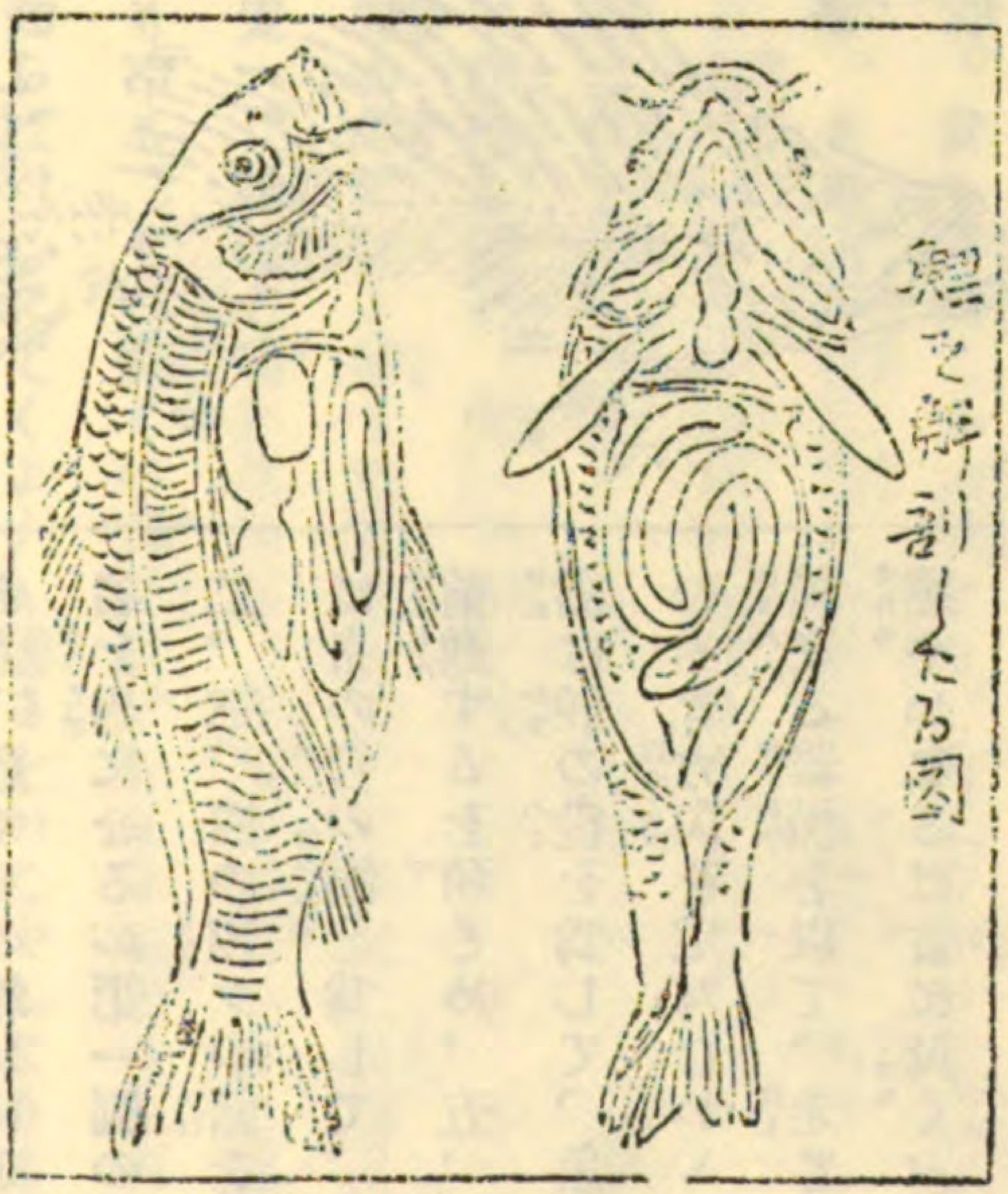


鱸の骨

內部の構造

魚には一つの專有の器械あり。人間も犬も、獅子も、兎も、誰も此類のものを有するものなし。之れは浮袋にして、第二圖に示めせるものなり。浮袋は、中に空氣を含みたる小さき袋にて、その大小により、魚をして浮みもし、沈みもするに適せしむ。故に海底にのみ住居せる、鮃目、鰒等の如き魚の袋は甚だ小なり。また頭と躰の境に當たりて、二個の大なる窓ありて、常に開閉す。これが開閉には、大なる目的あり。即ち口の中に吸ひ込みたる水を、此の處より吹き出だす道すがら、窓の內部に鰓と稱する赤き褊の如きものありて、此處にて、躰中を巡廻せる暗き古るき血液に接し、水中の酸素と、化合して、躰の温度を、水と平均ならしむ。生魚の鰓は、此の働を間斷なく為





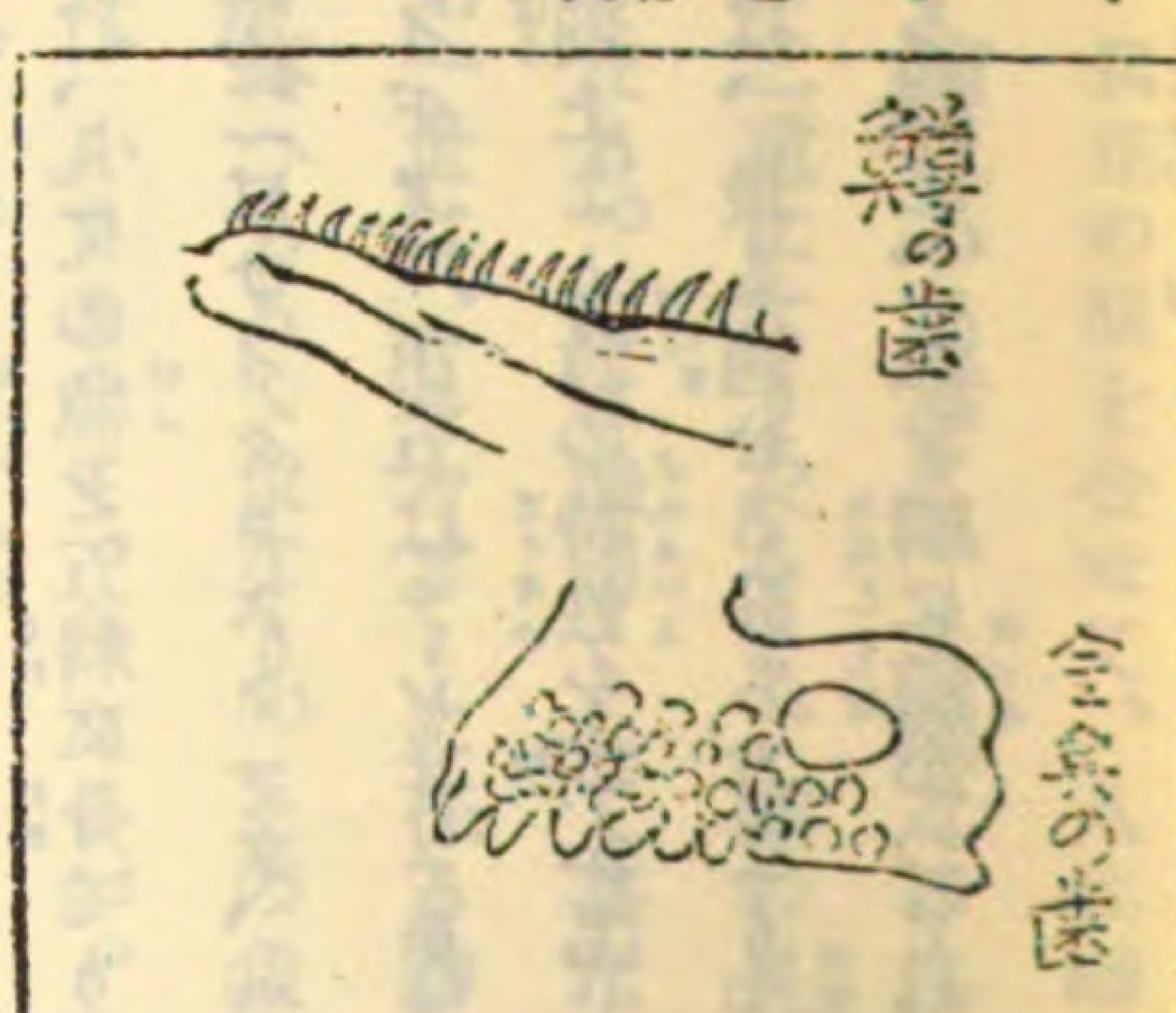
すが故に、常に赤けれども、死する時は、此働を廢するが故に、その色漸々變じて白色となるに至る。魚の新鮮なると、腐敗に近かきとを見分るに、鰓を見るは、之れが為めなりと知るべし。第三圖に鯉の鰓と其の心臓を示せり。通常他の動物の心臓は、惡しき古血を受くる袋と、之れを新鮮にして、更に發送する袋と、二

個あれども、魚には惡血を入るゝもの一個あるのみにして、此處に受けたる惡血を、鰓に送れば、鰓が心臓の代理こ爲して、躰の全躰に配當する也。

眼と耳と齒

心して見よ、魚によりて、其眼は躰の割合に比しては非常に大なる者あり。鰹と稱する魚は、恰も人間の頭全躰の半を、眼にしたる程の割合の眼あり。之れにて、常に外物の來襲の免かれんと、四方を見つめつゝあり。人間の如く、瞼はあらざれども、その代理を勤むる皮ありて、常に眼球を覆へり。羨魚の目の中に眞白き玉あり。之れは生ける時は、透明なると水晶の如くなるが、その後部に當りて、小さき無數の襞ある膜ありて、水晶の玉を通じて、得も云われざる美事の光を發射す。

不相應に大なる眼を有する傍にありて、耳は又た意外に小なり。他の動物の如く、外に開きたる所はなけれども、その音を能く聞くとは、細徴なる音も必らず之れに達せずと云ふと無し。之れは水が音を傳ふると速やかにして、且精密つなるが故とは云へども、耳の搆造の精密なるも預かりて大に力ある事也。



齒に至りては、更らに奇態なるものあり。或る魚の齒は、細そきと、綿の毛の如く、多きと絨鷲の如くにして、屢々指にて觸るゝにあらざれば、知る能わざるものあり。或るものは、猛獸の齒の如く、鋭どく、尖りて如何なる敵の骨も、肉も、一擊の下に碎くるものあり。或る者は臼の如く平たくして鈍きものあり。特に或るものゝ齒は、上腭にあり、或るものは喉にあり、或るものは鰓の付け根にあり、或るものは舌にあり、

中にも鮭の一種にして、齒の上腭に三通り並びて生たるものさへあり。かゝる齒のある魚は、大概肉食を爲して、生育すれども、中には齒の全く無くして、柔軟なる植物を食して、生育するものもあり。その生長の遲速は、食物の充分なると、不足なるとによりて分つを得べし。

産卵

一寸考ゆる時は、一匹づゝの魚が、一度に幾千幾萬づゝの卵を産じて、一年に一回、或は二回、四回も産卵する時は、海中は魚の山を作り出して、動きも得ざるべく思わるれども、そこには又た上帝の賢しこき攝理あり。魚類は己れ專有の産室を持たず産婆も無ければ、看護者も無きが故に、産み度き時は、何れを問はず生み付けて去る。此かるが故に、生れたる卵の幾分は波にさらわれて孵化せず、その幾分は他の魚の餌、若しくばその卵を生みし母の、夫に當るべき魚に食われ、幸にその一分の孵化したりとするも、未だ米粒大にも爲らざる中より、一つ二つ若しくは十四二十四、一度に他魚の餌となり去る。これが故に、一度に多く産出するの要あるなり。

以上は冷血動物と云わるゝ魚類が、如何なる搆造によりて、成り立ちたるかを、極めて簡短に記るせしものなるが、尚ほその種類に付き、一々委しくしらぶる時は、實に奇々妙々なるもの少なからず。

魚の種類

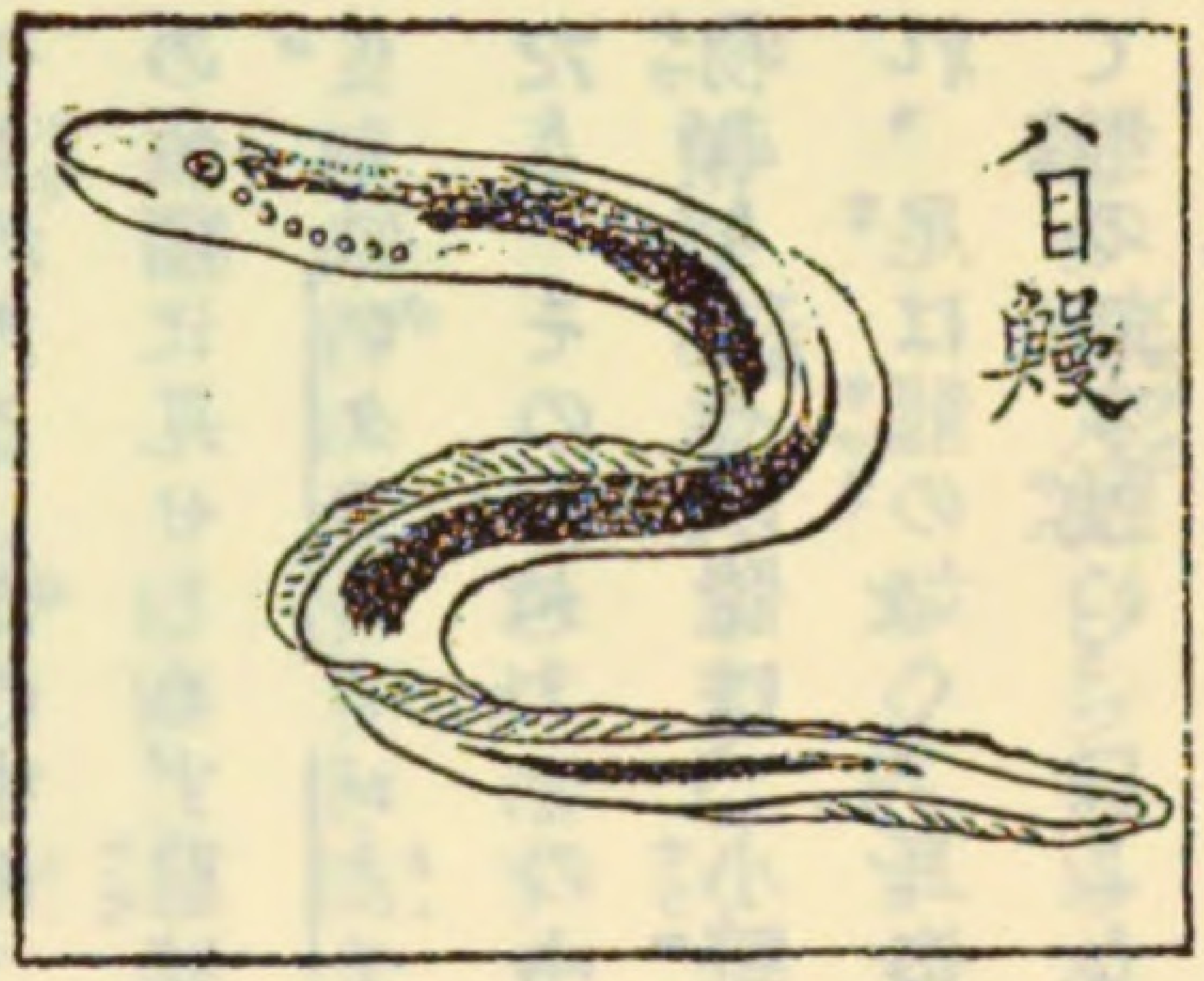
佛國大學敎授ムーレー氏は、凡ての魚を五科に分てり。第一はレプトカアヂア、第二はサイクロストマタ、第三セラシア、第四はガノイヂア、第五はテレオスチアなり。同氏は主として解剖上より魚の特性を別かちしものにして、動物學者には、最も適せる分ち方なり。或る人は生物學者に益ある樣に、魚を鰭に隨がつて分てるもあれど茲に畧す

第一、レプトカルチヤ

此の科の中にあるものは、重もに柔軟透明にして、其丈二寸にも足らざる小魚にして、口は全く腭を欠ぎ、強壮にして、眞に心臓と稱すべきものなく、通常海濱近かき砂の上に生育する魚類を含くめり。

第二、サイクロストマタ

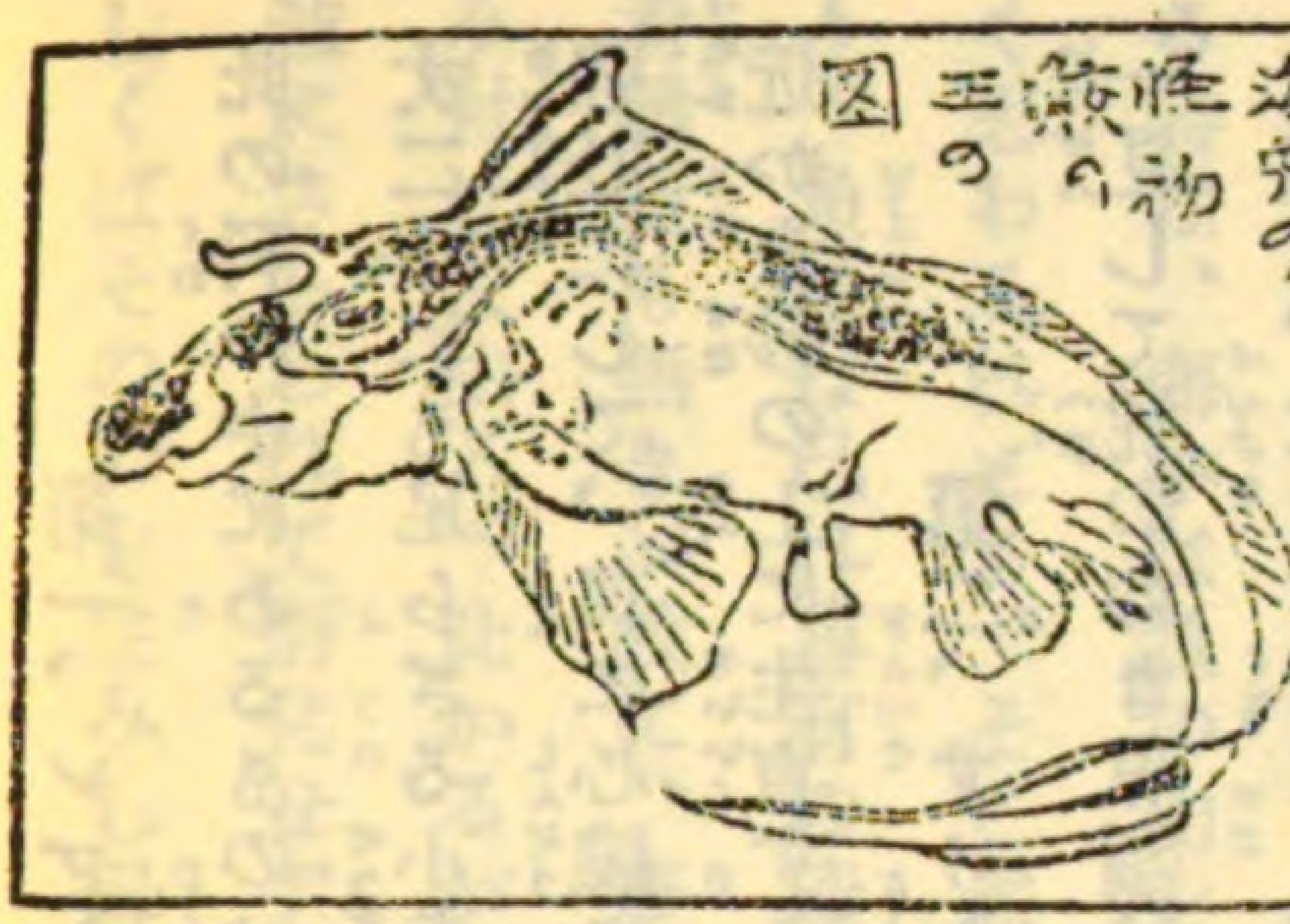
一見して蛇の如き魚類は、此の科に屬す。即ち此種の魚類は、大なる口なく、脇鰭、腹鰭、共に存せず、躰長して鱗なく、之れに觸れてドロ〳〵したる魚を云ふ。骨軟く皮ドロ〳〵としたる魚ありて、捕ふるに不便なり。鰻、八目鰻等は、屢々その標本として示めさる、人々の知り給ふ如く、八目鰻は、兩の脇腹に空氣を呼吸する七個づゝの鰓ありて、殆ど眼の如き形を爲せるにより、眞正の眼を合せて、八眼鰻と呼べり。海にある者と、河にある者と、大差なけれども、海産のものは、歯の二重になりたると、躰の長くして大なるによりて分かたる。肉は油强くして甚だ美なるが故に、ヘンリー第一世は、エルボーに在る時、非常に過食せりと、云ひ傳へらるゝ位なり。その魚類が、好んで餌するものは、小さき虫と、魚なるが、遙か隔だゝりたるものを、吸ひ込む力の强きが故に、石垣岩礁に潜れ居る時、屢々鰻針と云ふ、釣針を吸ひ込むによりて、捕獲せらる。


八目鰻

第三、セラシア

此の科の中には、海老魚、赤えび、狗こざめ、鯆魚、杓鯆、雙髻鯊、鮫、鋸鯊等の恐ろしき魚類を含めり。何れも全たき鰭と、通常なる鰓を有し、中にはヌル〳〵としたる體のものもあり。繁殖の方法は、胎生の者もあり、卵生のものもあり、卵生のものは、大概骨にて

作られたる、器の中に、卵を安全に包みたり。之れ他の魚類に見せしめず襲はれざらんため也。此の科は、更らにシタリナ、レイナ、スクワリナの三種に分かれたり。そのシタリナの中にありて、小説の樣なる一怪物あり。その體は、小野羊に類し、頭は獅子に例へられ、尾は龍の如く、耳迄裂けたる口、振り立てたる立て髪の如き鰭に、口より火を吐く樣は如何にも小説にある龍とも云ふべき風あり。獅が獸類の王と稱せられし緣故を以て、此の魚もその頭の形によりて、鮫屬の王と稱せらるゝに至たれり。上圖に示めせるは即ちその圖にして、長さ三尺より四尺に至り、銀色の皮に、鳶色の斑點あり。多く北海に產出し、通常は海中の軟體動物、若しくは甲殼屬を食として生育すれども、王の名に背むかず、他の鮫類を食ふと屢々なり。レイナ種の中には、又た五六の小別れあり。或は頭の突き出でたるにより、或は鰭の羽の如き形により、尾の長短により體の丸きと、平なるにより、眼の形により、齒の種類によりて各々小別を爲せり。(續く)



海中の怪物 鮫の王の図

文藝

幼なき兵士

藤島雪子

若菜しけれる下かげに
兄と弟のふたりつれ
木もてつくれるあらごまに
二入ひとしく打のりて
ゑほしかふれる弟を

みかへりなから兄はいふ
「われら二人はちゝ君の
御ゆるしうけてけふよりは
海山へたつる朝鮮に
み國のはたをひるかへし
力のかきりたゝかひて
こまもろこしも何のその
人にすくれしいさをたて
日本男兒のをゝしさを
とつ國人にしらしめん
おくれずすゝめ弟よ」
弟は聲もいさましく
「われはすくれしつはものよ
わか名はますらを桃太郎
けはしきみちをよしやよし
敵いくまん騎よせ來とも
いかておそれんひとうちに
われうちちらし平けて
多くのたから舟にのせ
あまたの從者ともなひて
ほまれおひつゝかへり來ん」
「げに〱いましのいふことく
わが名もいまの清正と
父君かねてのたまひき
その父君は軍人
いさなひつれてゆきましき
われ彼國にいたりなは
おく山ふかくふみのほり
みちなきみちもわけ入りて
われこのやりを打ふるひ
野にふす虎も狼も
いけとり來りてわか庭に

はなちおきつゝなかめてむ」
「あなおもしろやさらはまた
われはつれ來しその子らに
こまものかたりかたらせて
ともに遊はんおもしろや」
ふたりは共にいさみたち
はせおくれたるつはものを
いまやおそしとまちゐたり
こまのたてかみなてつゝも
「いましは弓を持つとても
あたもしちかく打かとみ
矢なくばさらにかひあらし
いかにおもふそおとうとよ」
「いな〳〵兄君矢はなくも
もし弓ゆりすはこのこしの
つるき引ぬききらんのみ

さても兄君きゝたまへ
われは思ぬ兄君よ
わか父君はいとつよし」
けさしもわれは父君の
つるきをとりて持ちつるに
なかきかうへにいとおもく
たへかたかりき兄君よ
けに父君は國人の
中にもすくれしつはものよ」
「あなよわき事いふものよ
さはかりよわきにいかにして
あたにむかはんいまさらに
いましはつれじわれひとり
先にゆかん」とすゝみゆく
「つれてよつれて兄君よ
われはその子ぞますらをぞ

つれてよつれて弟も」
兄のたもとをひかへつゝ
聲のかぎりによびさけぶ
折からかなたの木かげより
喇叭の聲を先だてゝ
たてたるはたのひら〳〵と
風になびくもいさましく
またいとけなきつはものゝ
十人ばかり來りけり
ともに喜びちかよりて
時おくれてはあしからん
いざいでたゝんとくゆかん
弟も來よと黒こまの
手綱かいとり先にたつ
兄につゞきて弟も
こまにむちうち人〳〵に
おくれじとこそいさむなれ
いざとはかりにおのがじゝ
つるぎぬきつれ聲たかく
うたひいでたるうたこそは
日本男兒のいくさうた
木たまにひゞきつたはりて
聲いさましくきこゆなり

砂上の文字（中）

一日東京より思ひかけなく一封の手紙來りぬ。其は絶へて久しき故鄕の叔母の出京し、二三日が間には妾の病氣を尋ねかた〳〵名所古跡見物に來る可しとの知らせなりき。書中更に妾をして手紙持つ手を震はしめたるものあり、其は叔母と共に妾が從兄も出京し、叔母と共に彼も妾が許に來る可しとの報なりき。

彼は未來を約せる妾が許婚の從兄なりき。

繰りひろげたる手紙卷かむともせず、妾は栗樹櫻樹滿地の蔭を落し光りの斑點處々にさゝめき躍る庭の面を打眺めぬ。妾が双眼は庭にありき、然れども妾が一心は此處にあらざりき。身は遙か離れし故鄕の田舍に飛び、身は幾歳の昔に立返へりぬ。

懷かしき吾故鄕、故鄕を思ふ毎にあり〳〵立顯はるゝ或人の面影。彼は妾が叔母の長子なりき。彼は妾に二歳の兄なり、妾が天神髷に結び初めし時、彼は學校に於ても已に最高級を占め、腕力膽力同年輩の中に並びなき五分刈頭の逞ましき少年なりき。金時の如き其軀格、其二重縁なる凉しき凛々しき眼、一文字にしまれる唇、左眼の下の小さき痣、聲凉しく言葉明らかに、擧動活潑なる一少年、アヽ思へば今眼さきに走せ去り走せ來る樣なり。春霞海の如く野に立ち渡る日は、如何に袂をつらねて共に土筆を摘み、蓬を摘みしよ。盆正月の祭禮式日には、客となり主となりて如何に互の家に往來し、席を並べて坐せしよ。妾が小學に通ふ途、或惡少年に惱まされて打泣き居たりしを、彼は如何に憤然走せ來りて其惡少年を打散らし、蟹の如く餘憤を泡吹きつゝ妾を學校にまで護送したりしよ。妾が母上の彼と約婚許婚の事を言ひ聞かされし時、妾が幼なき方寸の裏、如何に羞恥さと嬉しさと鬪ひしよ。

此は五年以前の事なりき。爾來妾は上京して去る學校に學び、彼は故鄕に留まりて家業に從ひ、偶ま一度歸省せる時も彼は他に行き在らざりければ、妾は彼と相見ざること殆んど茲に五年に及びぬ。少年の彼は妾之を知れり、妾は未だ壯年の門に立つ彼を識らざるなり。妾が家も彼の家も堅く禮義を守るの家なれば、相別るゝ五年、彼と妾の間には殆んど唯一回の手紙の往復もあらざりき。然れども妾は彼を忘れざりき、忘れ得ざりき。年月の瀾は立ち重なるとも、日又日の事は多く

樂は忙はしけれども、目に觸る人は多けれども、妾の心は兎もすれば轉瞬の間に故鄕に飛び、故鄕に飛ぶ毎に或人の面影を思ひ出でずんばあらざりき。秋の夕べ、校舍の西窓に倚りて夕陽を送るの時、雨降りしきる日曜の朝、思ひ出づる所なくんばあらざりき。妾は多感の女性の中にも猶更に多感の生れなりければ。

記憶より記憶に溯り、想像より想像に移り、恍惚白日夢に入れる時しも、一陣の靑嵐颯と靑葉が間より吹き來り、手中に羽たゝくものあり。吾に返へれば、是れ叔母の手紙なりき。二三日中には、妾が從兄と共に來り訪はむとの叔母の手紙なりき。

＊　＊　＊　＊

二三日を經て、蟬聲樹上に噪々として日は漸く暑くなり初むる頃、一個の老媼一個の靑年の男子を伴なひて妾が宿を訪ひ來りぬ。是れ妾が叔母と從兄なりき。

二年前に見たりし叔母は左程老ひても見へざりしが、五年逢はざりし從兄は見知らぬ迄にいたく變れり、彼は色黑き大男となり、手足倔强に、肩張り怒り、あはれ猪をも手捕にす可き男となりぬ。唯其の眼の凉しく凜々しき、其左眼の下の痣のみぞ、其人なるを知るの便りなりけり。

聞くに快よきものは、春雨の軒の天水、夏の夕立、木の葉戰がす風の音、淺瀨を奔る水の音、わけては戀人の聲、更にまた慈母の聲、鄕音も亦其重なる一つぞかし。訛みたる邊音と言葉と、笑ふ人は笑へ、吾には天樂にも優る心地ぞする。況して懷かしき人の鄕音をや。

世には四五年も田舍より東京に出で、學校に入りて縱横文字の幾個を知れば、自から高く標置して心は故鄕の田舍臭きを疎み、其心に故舊を疎み契約の男をさへ忘れ了るものあり、左あらぬも朋友などの前にては田舍の親戚故舊の來訪をすら耻ぢ厭ふものありとかや。

妾は萬づの事に短かきも、唯左ることをば爲し得ざり

き。幸に妾を高慢と咎むる勿れ。妾は務めて斯く爲したるにあらず、唯妾は眞に田舍者、五年東京にありても依然田舍者なりしが故に、斯くありしのみ。

葉越しの月光水の如く疊に落つる松影墨繪の如き夜、端居して故鄉の消息知己の消息を聞き、此方の生活の有樣を語り、寢ねても〱日の暮れやらぬ永き日に、名所古跡を案内し廻はり、日は靜かに過ぎぬ。妾は暫らく與に住みて、從兄の人となりの重ず可きを知りぬ。其無骨なる態裁の内に、如何に剛毅眞率にして且つ優しき心情を藏くせるかを覗ひ知りぬ。妾が宿れる家にも幾多の青年男子ありき。妾が許に折々遊びに來る者の中にも幾多の風流瀟洒なる青年男子ありき。彼等の或者は巧みに外國語を使へり。或者は婦人の眼より見てすら一點非難の打所なきまで十分に服裝躰裁を飾れる者あり。或者は話上手にして巧みに人の機に投ぜり。或者は金に豊かにして黃金の光りを常に見めかしたり。妾は其光華と見榮の著しきを見ざるにあらず。然れども妾は心竊かに彼等に滿ざる所ありき。妾は從兄の恰も今地中を出でし寶石の塊の如く、未だ磨かれざるの圭角土砂あるも、内に明月の如き光りある貴き石あるを見て、愈々其慕ふ可きを思へり。妾は彼等が燦たる光りを見かし居るも、其は擬製の寶玉の美しきに過ぎざるを思ふて自から之を擯斥するの情起りぬ。妾自づから誇るにはあらざれど、故鄉に在て從兄と約を結びしよりこゝに五年間、未だ曾て一度も吾心の戶を別人の爲めに開かざりき。况して今眼前に其人を見るをや。

叔母の上京は、死する前に一ト度東京見物をなしたり、また一には妾が學校を出づるの期も近ければ、親しく相逢ひて十分後の事も定め置かむ爲めなりき。叔母は只喜びに喜びて何事も殘る所なく打明け語らひしも、但從兄は妾を見てより何か心に思ふ所あるもの丶如

く、笑ひもし語りもすれ共、其は猶海底に渦巻くも海の面は騣程の波もなきと一般、其底に何か殘れるものあるが如く見へぬ。

ラシーヌが病める子に與へたる書

たけだ くら子

ラシーヌ Racine は佛國第一流の劇詩人なり。その著皆「愛」を以て充たせるが、たゞに公行の作のみならず、斷篇零墨亦愛ならざるなし。その子を愛することと最も深く、ナミユール Namur の戰地に從軍せし際、數次書を病子におくる。本篇はその一なり。子を思ふ情、人をして感動せしむるに足る。❀

先達て御身の母におくりたる手紙にても志らるべくは候へども、父は實に御身の病を案じくらし居り候。始終御身の傍にをるを得て慰むる術なき苦るしさはいかばかりか御察しあるべく候。神樣の御罰をおもひてはよく〳〵愼まれ、人々の忠言をよく聞きわけらるゝことゝ存じ申し候。くれ〳〵も愼しみ居らるべく候。父は神樣の御かげにて御身に過ちなき樣祈り居り候。一たびは誰しも病にもかゝるものにて候へは、年とりて苦しむよりは今のうちに罪業消滅いたし候事却て幸ひに候べく候。父はそなたの手紙を讀むをかれしうは思へども、病躰にさわらぬ樣書かるべく候。手をだし書きかけて思はずぞッと寒けのする樣なる事は無之樣心掛けらるべく候。身の病の少しにても怠り候はゞ父はナミユールの勝況を報じ申すべく候。やがてかくなるべくに。またその後は父も御身の傍にありうる樣になると思へはかれしく存じ申候。神樣に御身の罪の消ゆる樣御祈りありて、元の身となり玉へ。世に誰か父の他に御身を愛するもの候べき。少しも早く御身の手をとりたく待兼をり候。以上。

家政

地震につきての注意

あへなくも地震は人々の心に、非常の驚怖を與たへたり。風の音にも箸を擲ち、鼠の騒にも洗足にて飛び出だし、晝夜安すき心の無きは、去る頃よりの東京市民の有様なり。前號の科學には、地震は如何にして起るかを委しく記るしたるが、今茲に之れを如何にして逃れんかと云ふことを、一言記るして、人々に幾分の安心を與たへんとす。地震を逃がるゝには三つの法あり。

第一、地震の甚だしき土地

事實は已に之れを證せるならん、過日の地震の時も、溜池の埋め立て地の如きは震動特に甚だしかりしと、そはその筈ならん。砂と塊まりたる土とをゆさぶりて、何れが早く裂け破るゝやと云へば、砂なることは明かなり。それと同じ道理にて地盤の固き處と、弱わき處とを比較せば、固たき處は震動を感ずること少なきは、一寸考へても明かならん。去れど吾々元より例外の事もなきことは云へず。又た地震の脈に當る時は、如何に固き地盤にても甚だしくゆさぶることもあれども、比較上、花崗石や、石灰石や、石盤石や、バサルト等の地質の上に建てられたる家は、破壞少なきは屢々その例あり。されば、地震のきらいなる人は、埋立地を避くべし。次ぎには火山に近かき所を避くべし。火山は恰も沸騰せる釜の如き、火の加減によりては、何時湯の沸へ溢るゝかも計られず、たゞに地震のみならず、燒け石燒け土の流れ出でゝ、家も、畑も、人も、獸も、殘とらず煮固めらるゝの恐れあり。何れの地にも、通常大地震には、時ありて、十年に一度の處もあり、二十年に一回の處もあり、或は一世紀に一度の處もあり、

毎年一回の處もあり、多少延び縮ちまるとはあれども、略ぼ定まりたる時間にあらざれば、大地震は、突然には來らざるものなれば、大抵は、時間を計りて心持をかば、常に心配するは無益にして、不時の大けがなくして逃ぐるを得べし。

第二、地震と住家

若し東京に、井戸、川、等の少しもなからんには、地震は一しほ劇げしからんも、窖のあるは、震動を弱わらしむ、その理由は當今の問題の一にして、未だ確說はあらざるも、家の周圍に窖を堀る時は、大に震動を減ずるは實事によりて知るを得べし。又た地震が東西にゆるゝ時に、家の壁が、同しく東西に長きものは破ぶれ易すく、震動と並行せざる壁は保ち安すし。たとへ並行するも、その壁に穴のあるものは破ぶれずと云ふ。その理は、廣ろき壁の前に立ちて、前後にゆさぶる時は、上は鴨居あり、下は敷居ありて支さゆるが故に、動くのみにて破ぶれざれども、その壁を横より動かす時は、縮ちまるべき餘地なきを以て、必ず裂け目を生ずるを以て知るべし。もしこれに穴あれば延び縮みの融通出來易すきが故に、堅固なるを得べし。

第三、各々の用心

南亞米利加等の如き地震多き國にては、種々なる企を以て、地震を逃がれんと欲するが、中にも地震ランプと云ふものあり。此のランプは、家等の倒るゝ時は、火は忽ち自然に消へて、火事の恐れなき樣に作りしものなり。又た地震の時に攜ふる衣服あり。それは、かばんを兼ねたる用を爲すものにして、その衣服をさへ攜ゆる時は、中に必要なる諸道具を備へあるが故に、不時の便に供すと云ふ。

地震の時は、早く逃ぐるを宜しと云ひ、或は惶わてざるを宜しと云へど、必竟するに、早く逃ぐべき時には逃げ、逃ぐべからざる時はおち付くを宜しとす。例へ

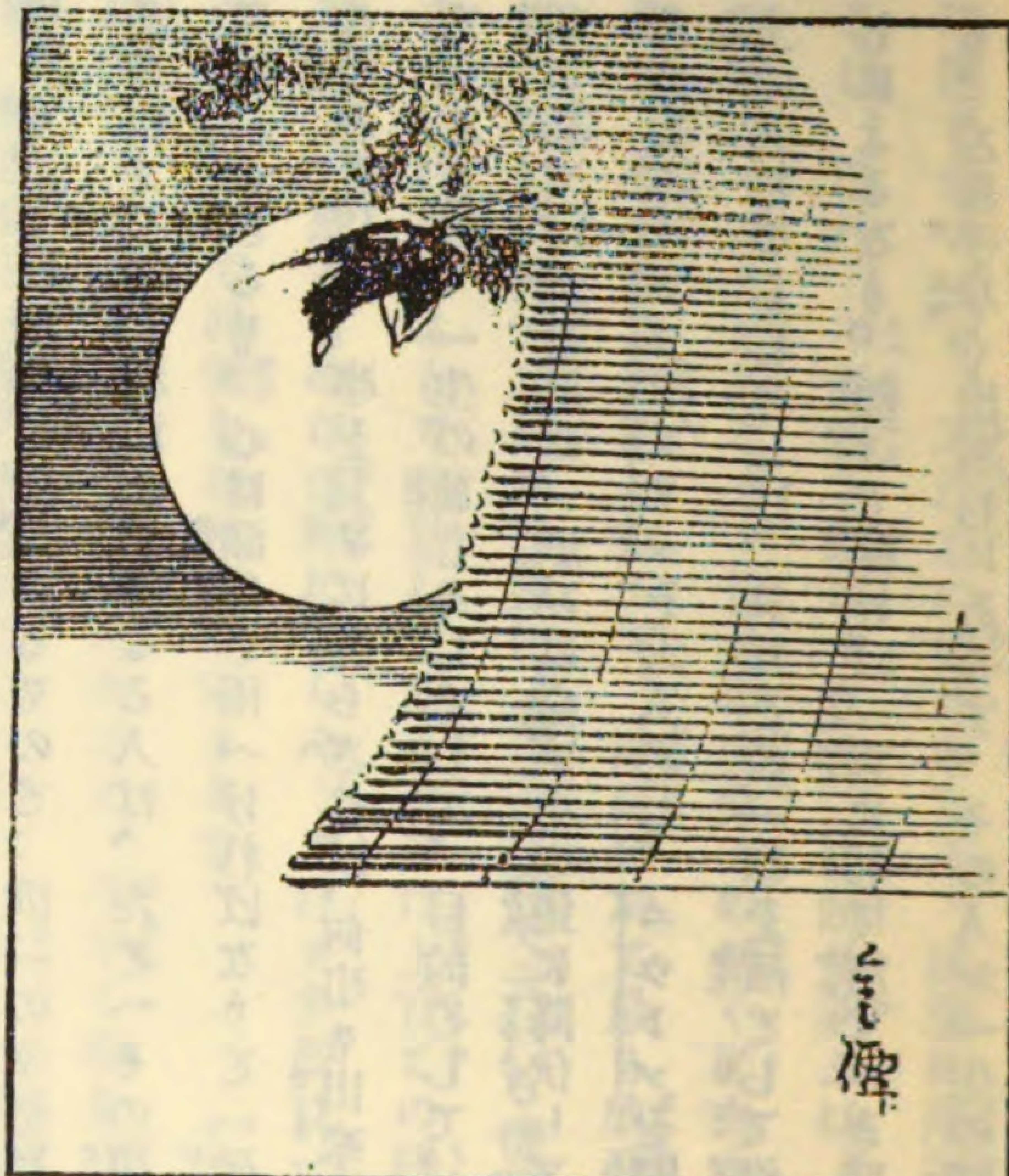
ば、二階三階等に上りたる時、俄かに地震せる時は、慌わてゝ下りざるを宜とす。反て重もき梁のために、打たれて傷を受くると多し、その時は堅固なる柱か堅固なる卓子などの傍に身を寄せて、上より落くるものをそれにて支さゆるの用意を爲すべし。椽側等の如き出づるに便なる處に居る時は、中に入りて大切の道具を持ち出すよりは、先づ身を助くるを第一とすべし。道具は地震の止みて後取りに入るを得べけれども、生命は再び拾ふべからざるが故なり。

要するに地震多き地にては、埋立地等の如き地盤の弱わき所に住するものは、兼ねて不時の用意を爲して、スハ地震と云ふ時には、慌つるがために、反てけがを爲す等の恐なからんとを用意すべきなり。又た科學の中に記るせし如く、地震の前には内外に種々の原因と徵候あるが故に、或は氣壓の甚だしき時の如き、或は動物の常ならず騷ぐ時の如き或は地鳴、或は井水、泉水の變動を來せるが如き時は預かじめ要意を爲しをかば、大低は大過なかるべし、

夏の夜ばなし

蚊に襲わるゝが爲めに勉强は出來ず、日の入りたる計りにて、眠るには、尙ほ早や過ぐ。止を得ず椽邊、庭の床几に腰かけて或は怪談、或は小說、或は芝居、若しくは鄙野なる流行歌に一夜の笑の中に終る。之れ數多き家庭が、夏の夜を費やす方法の一なり。一寸の布片も縫ひ集むれば五尺の男子を蔽ふべき衣服となり、一尺の切れも、捨つれば塵桶の垢と化すべし。我等が暑し、寒しと云ひて過ごすその時間にも、小見は生長し、老人は老ひ、學生は進步し、世界は終りに向つて一步づゝ歩みつゝあるなり。特とに世話しき母親が、小供に精神を吹き込み、小供を生ける人物にも、死せ

る人間にも爲し得るは、夏の夕べを措ひては、又たと



好き時間は少くなからん。今其話しの材料を一ッ二語らんとす。

（一）志あれば道あり

佛國に一人の若か役人ありき。其人事を爲すにも、歩行するにも、常に口癖にせる一つの語あり『余は佛國の大將軍とならん』と。未だ生へ出でし計りの若人にして、常にかく云ひつゝ事を爲すを見て、人々は彼を馬鹿にあらざれば、氣違ひならんと、相手にもせず、爲すがまゝに打ち捨てけるが、驚くべし『道は志に隨ひて開け』、彼れ大將軍の位にありて死を全ふせり。かゝる話はめづらしき事にあらず、英國にて「一人の大工、毎日人に雇わるゝ汗を流がしつゝ、或は建築をなし、或は修繕を爲して日を暮しけるに、或る日府廳の椅子を受け負ひて修繕なす中に特と更ら市長の椅子に念を入るゝと一通りならざれば、或る人その故けを問ひけるに、こは余がこの椅子に椅る時あるべければなりと答へしかば、その人は戯談を笑ひて立ち去りたり。然るに數年の後、一人の新市長出來たるに彼は、元との大工ならんとは何人も意外に思ふたりと云ふ、こは餘りに話しが甘ま過ぐるに似たれども、皆事實にして、昔し一の英雄も、皆偶然に英雄となりしにはあらず。

常に願ふ所の目的に向つて、凡べての力、凡べての志を集めて歩を進めしによれり。されば彼のナポレオンは常に『眞ことの智恵とは眞の決心を持つにあり』と云ふ語を味わい、愛して行へりと云ふ。シラクと云ふ人は、常に云わく『精神の虚弱なるものは、憐れみて可なり。そは精神の健全なるものと、同一の幸福は取るを得ず、且つ精神の健全なる人は、たとへその事業に成功せざるも、心は滿足を得べければなり』と『確なる望みを以て、事を爲すに非らざれば、何事も出來ず』と云ふとを、一生の旗じるしとして、目的として、金言として、進む時は、成功は必ずその道に降伏して随たがわん。フランクリンを大人とし、ニウトンを歴史上の人とならしめしは、只だこの一事を盾として進みしによるなり。後より聞けば一言にして解すべき發明も、左程手早く出來しにあらず。その人が一生の間、食事の時も、遊ぶ時も、常に腦をねりて、凝り固たまり、怠惰と戰ひし結果なり『强固なる希望は爲し得べしと思ふ事を實際に爲さしむ』とは之れ等の事を云ふなり。

(二)性　質

一生の冠とも、榮ともなるべきものは、性質なり。富貴は得られざる場合もあらん、されど好き性質は誰れにでも、價なくして得らるゝなり、智慧ある人は用ひられん。されど惡人の智慧は、好む處にあらず。才あるものは必要なり、されど才のみにて、人は世に立ち得べきものにあらず。たゞ善き性質の調合せられてより、才も、智も、用ひ處の出來るなり。善ならざる才智は、用を爲さゞるのみならず、反て世の害を爲すなり。

(三)不運と幸運

世の人多く運を云ふ。されど運は天より來るものにあらずして、皆己れの作る處なり。病氣の來るを不運と

云へども、病氣は不養生の作りしものなり。火事あり不運と云へども、不注意の招く所なり。試驗に落第するは、己れの不勉强を顯はすなり。盜賊に遇ふは、家にしまりなきが故なり。世の事大低人の招くに由りて生ず。有名なる判事に向つて、法廷に於て最も成功するの道は何ぞやと問ひけるに、早速答へて云へる樣『或るものは才によりて成功し、或るものは上官との緣引により、或るものは奇跡によらん。されど多數は一錢の財なくして其業を初めたるによると。

注意と、精密と、嚴格と、規律あると、手早く事を成すと、物を正しく適用するに慣るゝ時は、大抵の事業は遂げらるゝものなり。日々の經驗に照らすも、歷史の上に引き合すも、注意の深かきと云ふ事は、成功の根本にして、勤勉とは、人が過つて幸運と呼び來りし、その幸運の母なり。

或る人何を爲してか、遂げし事なし。人怪みて彼の主義目的とする處を問ひたりしに『明日に延ばし得るとは、成るべく今日爲さゞるにあり』と答へしと、時間を儉約して世話しき中より、閑暇を見出だすは、成功の道なり。物事を追ふて爲すに引き更へ、物に追はるゝ時は急ぎと、混雜と、困難とに後とをしを爲られて通例爲せば、さ程にもなき事が、倍にも二倍にもなりて、人を苦るしむ。トラファガルの大戰にて英國海軍の名を擧げし有名なるネルソンは云へり『余が一生の事業の成功は余が定まりたる時間より先だつこと二十五分前に事を初めたるにありと』。

（四）規則正しき事

規律正しき程、人の信用を招くものはなく規律なき程人の不信用を招くものはなし。規律も亦た忘るべからざる大切なる道具なり。物に規律なく、爲すべき事を爲さず、爲すべき時に爲さゞる程厭ふべき事はなし。ワシントンの書記、或る時己れの爲すべき事を遲れし

を、時計の罪に歸せんとせしにワシントン嚴命して曰く、汝以後汝の時計を更ゆるにあらざれば、余は他の書記を雇はんと、フランクリンの下僕も、時に遲れがちにして常に『許るし賜へ』と云ふ口癖ありしかばフランクリン云へる樣『善く許容を請ふものは何事にも適せざるもの也』と。

規律なき人は、己れの事業を妨ぐるのみならず、又た他人の仕事の邪魔す。汽車に乘る時は、いつも汽車の出でし後にて來り、郵便を送る時は、郵便の出でし後にて投函し、人に約束して約を遂げず、常に後るゝ人なり。かく事業に後れを取る人は、通常成功にも後れを取る人なり。

信實善心と云ふとは、恰も家の礎の如し。兵士の勇氣も、宗教家の慈善と、商人の信用も、その中より出づ。古語に信實は眞正の政略なりと云へるは、日々の事業の上に、最も大切なる言なり。一代にして仕出したる身代は、一代につぶるゝと云ふは、不正の事を爲して、得たる金錢なるが故なり。信實を以て築き上げたる塔は、中々に倒るゝものにあらず。

耕作に三つの德あり

夏時に三つの困難あり、一は暑さのために運動を怠たるが故に、消化不良の病を起すと、二は庭前の雜草、一夜にして生長するが故に、眞に庭の淸きを欲するには、毎日〳〵草取へらを以て、走り廻らざるべからず、第三は大耕作を爲す百性にては、水を灌ぐと行き屆かざるが故に、靑き野菜は殆ど八百屋に後を絕ち、會々之あるも、虫付きたる小さきものにして、食用に供するに足らず、之れを夏時の三大困難とす。然るに自ら耕作せば、一つ以て此の三大困難を除くを得たるが故に、利益之れに勝るものはあらず。即ち朝早く起き

出で太陽の未だ山の端にかゝらざる中、軽ろ〳〵しく出で立ち、草を去り耕やして、種子を蒔く時は、雑草



は其菜のためにおさへられて、生長することを得ず、かたく〳〵青くして、新鮮なる蔬菜を得べし。此の頃より蒔くものは、廿日大根、小松菜、ふだん草、胡蘿蔔、西洋豌豆、薤、小葱、練馬大根、尾張大根、丸尻大根、櫻島大根、秋蕎麦等とす。

洗濯ものと染めもの一斑

蟻は炎暑を犯かして食物を貯ふるが故に、冬日安臥して食ふを得べく、蟬は暑さの中に歌をうたいて、彼處此處を遊び歩むの外、何も爲さゞるが故に、涼しくなりて、餓死すとは、賢しこきイソップが譬話也。我等も、此の頃の日光を利用して、冬衣の洗濯を爲さゞれば、一度秋風に出遇ふて、悔ゆとも及ばざるに至たらん。特とに衣服等のごときは、洗濯の仕様一つに由りて、古きものも新らしく、新らしきものも古くなり、特に夏向き垢じみたる衣服を着するは、第一健康にあしく、次ぎに他人に對して失禮なり。今ま洗濯の法二三を示めさん。

○血の付きたる衣服

夏は蚊蚤の來襲するが故に、折角昨日仕立おろしたる

白地の浴衣に、血痕點々たるとあり。之れを全躰に洗らへば、所謂洗濯ものとなりて、新らしきものを害するの恐れあり。その時は、口に水を含みて、唾きの混じたる水を以て、血痕の付きたる所々を、摘みて洗ひ、絞らずして、手のひらにて能くたゝき、竿に乾す時は、他の部分を害せずして洗ふを得べし。含み水は、石鹸と同じ位ひの効能あればきれいに血痕を去るを得べし。

○墨の付きたる時の心得

學校通ひの小供の衣服に、墨の付かざるは稀れなり。墨は中々におちざるが故に、誰れも困る處なれども、米飯にて洗へば能く去るを得べし、即ち墨の付きたる所へ米飯をつゝみ、恰も米の糊を作るが如く摺擦する時は、墨は米飯にしみ込みて、片より去るべし。

○インキの付きたるを去る法

インキの付きたる時は乾はかざる中にアンモニヤ（藥舗にあり）を以て洗らへば去るを得るとは已に書したるが、經驗ある洗濯屋の談に随たがへば、インキの汚點は牛乳を以て洗ふに、甚だ好結果ありしと云ふ。

○黏の付きたる物品

蟬を取りなどして奔走によりて健康を益すは良けれども、困るとは黏の衣服其他のものに付きて、取れざるにあり。若し洗ふを得べき品ならば、種子油にて洗ふもよけれども、衣服などは、油にては悪しければ、大根をおろして、その絞り汁るにて洗ふべし。

○油しみたる衣服

半襟等の小切れの油じみたる時は、氣發油（油屋にあり）にて洗ふ時は、立ち所に美しくなるとは、人々の知り給ふ所なるべし。絹布の油じみたる時は、水一升に、鹽一合の割合にて、一度沸騰せしめ、少しくさまして油じみたる處を浸し、擦まざる樣、濺ぎて洗ふべし、若し水に入れ難たき物品ならば、滑石を粉にし、

之れを油の付きたる處へ撒布し、その上に紙をしき、火斗を以て摩擦すれば除くを得べし。又た羅紗に油の付きたる時は、薄きポッタースにて洗ふか、又は吸取紙をあてゝ、其上に火斗をかくるもよし、右は通常の油の付きたる時の心得なれども、肉脂の付きたる時は、洗らわざるを可とす、肉脂は柔らかき金巾片れにて拭ひ去り、その後を布片にて幾度となく、摩擦する時は取り去るを得べし。

○ペンキと澁

ペンキの付きたる時は、石炭油を浸したる片を以て拭ぐへば、容易に落ち、澁の付きたるものは、白砂糖もみ付けて、能く洗らへば落つるなり。

以上は何れの家に於ても屢々起る處の困難なれば、妻君たるものは、常に知り且つ忘れざるを要するなり。

窓及窓硝子の掃除法

窓及窓硝子の掃除法は種々あれども、其中最も適當の方法は石腦油(藥種屋にあり)を以て行ふ法なり、先づ一個の鉢に石腦油を大形の卓子匙二杯を入れ二倍の水を混和し、手より少し大きなる軟き布地を取り、其液中を浸し、之を出して窓、窓框及硝子の汚穢を拭ひて後、新聞紙にて其後を拭ひ、更に西洋手拭を以て淸潔にするなり。

此方法は石鹼水よりも容易に且つ神速に硝子やペンキやの汚穢(蠅の糞等)を奇麗に掃除することゝを得、大抵右の分量にて通常の窓二個を掃除する事充分と知るべし。夏季は窓等は塵埃を蒙り易きものなれば掃除法を怠る勿れ。

書物及書物取扱規則

方今日本が文明の世界に進歩するに從ひ、其一大利器たる書籍の出版月に日に時々多きを加え、實に汗牛充棟も啻ならざる有樣となり、書籍、雜誌、新聞紙は津々浦々までも普及し、牛牧ふ童も漢語を遣ひ、洋學院の雇もA.B.Cを囀ずるに至りぬ、これ明治の恩澤太平の餘徳と雖も、古人も言ひし事あり悉く書を信ぜば書なきに如かずと、されば書物の種類を撰ぶは讀書家に大切の事なり、左に西洋にて書物の撰擇法並書物取扱法の概畧を記すべし。

（一）週刊又は月刊の雜誌類は一綴にし書物と爲し置く方便利なり。

（二）自身の學問又は目的に關係ある書物を買ふべし。

（三）無價値又は不信用又は見すぼらしき書冊を買ふべからず。

（四）最善なる書籍を買ふべし、ブルターク曰く書を讀むは吾人の滋養に鮮肉を喰ふが如し、愉快に感ずるよりは利益（則ち滋養）を得る事大切なり。

（五）浩翰の書よりも袖珍のものを買ふべし、サミユエル、ジヨンソン曰く火の側に持行かれ或は携帶便利なる小冊子は須要のものなりと。

（六）同し種類のものを澤山買ふ勿れ。

（七）完全なる圖書室或は充分なる金圓を有する迄は一著述者のものを偏集するは宜しからず。

（八）一種の月刊文學雜誌と二種の週刊宗教的雜誌を取れ。

（九）所有書籍の目錄を造り置け。

（十）各冊己が姓名、買取時、買取價を記し置くべし。

(十一) 貸本屋の帳面を製し置くべし。

(十二) 買ひたる書物は必らず讀み、又必らず讀むべき書物を買ふべし。

(十三) 火の側には書物を近付くる勿れ。

(十四) 床に墜落せしむる勿れ。

(十五) 拇を以て「ペーヂ」を開く勿れ。

(十六) 開きたる書の上に物を置く勿れ。

(十七) 開きたる書を伏せて「ペーヂ」の綴を傷むる勿れ。(未完)

家庭に於て爲すべきこと

やぎ生

節約　美味なるものは旨く、美麗なるものは心地よきは、千萬人通じての情なり。されば一と度び奢侈に馴るゝや、愈増長し、家内の經濟には頓着なく、忌むべき借財まで爲して欲を充たし、其極家庭の不和亂脈を來すべし。この時に當りて如何にこれを矯めんと勉むるも、一旦染み込みたる奢りは容易に失せざるなり。故に食物は、美味を擇ばずして新鮮を旨とし、衣服は清潔を度とし、勉めて冗費を節し、以て他日の用意に備ふべし。嘗て德川家康の遺訓なるものを讀む、卷中、奢りは家を亡すの源なり謹むべし、との語は數ふるに遑あらざる程なり、尤奢りの不可なるは、家康を待て知るべきにあらずといへども、家庭の誡めとして服膺すべきことなり。

日記　家庭に日記なきは猶國に歷史なきが如く、後世子孫に到りて我家の歷史を知らんとするも、能はざるなり。勿論家系書なるものありて、其血統を知るを得べしといへども、如何なることを爲せしや、如何なる朋友ありしや、如何なる功勞ありしや等のことに到りては、日記類を以て知るを得べきなり。又日記は後世

子孫の利益のみに限らず、記述者自らは最も要用を感ずるなり、手近き例は、余先日數年以前の受取金月日を要することありしが、日記に據りて、容易に辨ずるを得たり。日記の利益は如斯些少のことに止まらざれば、是非とも調製し置きて、家庭に於ける日々の出來事を書き記し、一日なりとも怠らぬよう致したし、若し一日なればとて次日に延引するときは、三日となり、五日と重なり、遂には記すべき事實を遺忘しこれを廢するに到るべし。

生命保險　吾々は斯く健康に日を送るといへども、何時、如何なる病の襲ひ來らんも知れず、されば衛生にはよく留意し、殊に夏時の攝生は最も緊要なるべし、恐るべき流行病の來るは概ね夏時なりとす、故に食物も淡泊にして消化し易きを擇び暴飮暴食を避け、身躰は勿論、邸宅內も常に清潔ならしむるを要す、然れども測り知るべからざるは人生なり、如何に攝生するも、死は吾人の免かるべきものにあらず、故に豫め死の來ることを覺悟し、遺族の爲めに生命の保險を約し置くべし、保險を約し置くときは、何時死するとも遺族は更に慌てることなく、跡の始末のつかぬこともあらざるべし。保險につきては本誌第二號に精しく記しあり。

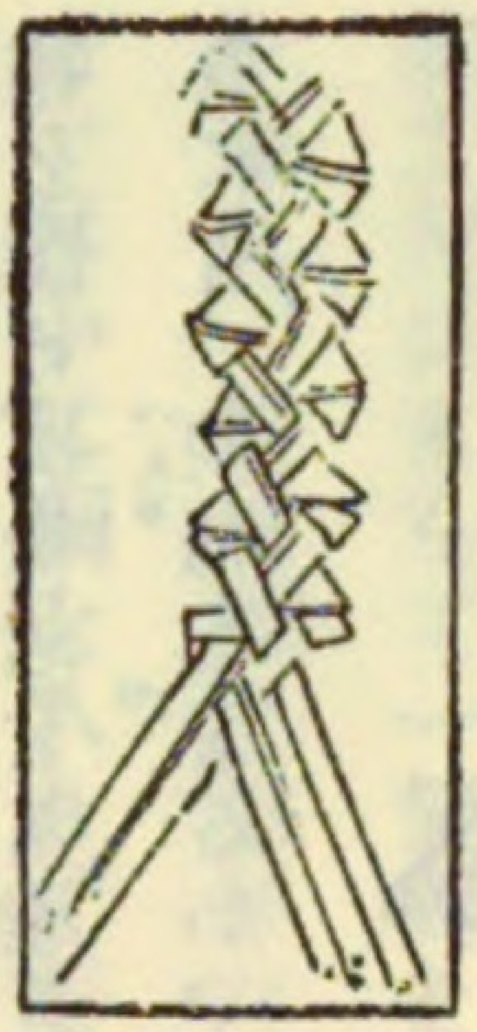
婦女職業案內

麥藁細工

目下婦人の內職として繁忙なる一は麥藁細工又は麥藁編なり、此仕事は婦人小兒と雖も容易に出來得べきものにして、又左程に熟練を要するにもあらず、麥藁細工には色々なる玩具等より帽子等の實用品を製す、昨今の仕事は帽子にして丸麥の穗の編代は荒き方に一疊(曲尺六尺)四厘乃至五厘、若し割穗に編みたるものは

一疊八厘内外なりと、内職者は日に幾程の賃金を得るやと聞きしに、蚕所仕事の閑に働くも、五錢より六錢の賃銀を得るとなり、素より器用と不器用との差別ありて賃錢に差別ありと知るべし。

其編方は本誌第十一號手藝案内の部に記載し置きたるが如く、用料麥藁は麥幹の穗頭なる淡き光澤ある茶褐色の纎維質を擇びて編むものとす、(麥藁を純白ならしめんには腐水に浸し置き段々と清水に移せば茶褐色は消滅し去るなり、亞硫酸に浸して漂白する別法あり)但し麥藁は隨分脆き性質を有する者なれば、濕氣を含ましめて柔軟なる間に使用すべし、又麥藁は自宅にて準備せずとも、其問屋に就けば原料を得ると自在也。」



麥藁編

帽子用麥藁編の方法は、三つ打、五つ打、七つ打等種々あれども、大抵圖によりて工夫し見らるべし、これは目下最も必要なる編方にして一疊の編賃八厘なるは是なり、麥藁帽子製造場にては大抵内職に出す、有志家は其最寄々々に就きて實行し玉へ。

手藝案内

甚兵衛と腹當

此頃の如き炎暑には大人は申すに及ばず、小兒老人は殊に苦痛を覺ゆ、二三歳迄の小兒の如きは皮膚軟弱なるゆゑに寒氣を感することの甚しきと同時に、暑熱を覺ゆる事も最も甚しく衣服を着せば汗生の腫物を生し、裸體に爲して放任し置く時は偶々感冒に罹る事あり、又裸體は小兒にても餘り見能きものにあらず、されど袖附の衣物を着せ置けば、炎暑に堪えざるのみならず、小兒には水遊びを好むものなれば、ぞべら〳〵の長袖は旁々以て不自由千萬なり、されば如何なる衣

物を撰めば炎暑をも凌ぎ小兒の衛生ともなる、遊戯するにも、便利となるか、それは言を俟たず、甚兵衛と腹當なり、これは誰しも知る如く、甚兵衛とは袖の無き單簡の衣類にして丁度鎧の上に着る陣羽織の如きものなり、一歳より二歳迄は木綿巾三尺にて襟も取る、



三歳前後ならば四尺もあらば澤山なり、布帛地は絽か紗に縮緬の袖縁と紐をつけし風情可憐此上なけれども、これは隨分驕奢の沙汰なり、甚兵衛は略服中の最も略服にて即ち不斷着のものなれば、白地の木綿切か麻地を用ひ唐縮でも附するが宜しかるべし、腹當は二歳位迄の小兒には木綿巾一尺もあらば宜し(二歳以上之れに準して見計ひ裁縫せば宜し)布帛地は腹部を蔽ふものなれば麻の如きかサ／＼するもの又は薄地のものは宜しからず「フランチルか」唐縮緬は最も適當なり、極暑の頃は夜間睡眠中と雖も、斯の如き温暖を失はざる腹當を着け置く時は、たとへ裸躰なりとも衛生に害ある事なし、併し蚊帳の中と雖も裸躰のまゝ腹部を冷すは感冒し又は下痢を起すの恐あり、母たるものは其小兒に、腹當に限らず腹部を蔽ふもの(蹈みぬぐ恐なきもの)を纒はせ置く事に心を注け置かざるべからず、昨今の如き極暑には却つて小兒をして風邪を冒さしむるの患ありと知るべし。

養蠶術(續)

これより少しく繭より生糸を製する術策を記して局を結ぶべし。

殺蛹法――大概上簇後八日目乃至十日目施行すべし、若し遲延する時は蛾を生ずる爲に其繭は眞綿に製するか或は出殻繭として安賣する外なし、而して殺蛹法に三種あり、一を大陽殺と言ひ、一を燥殺と言ひ、一を

蒸殺といふ、大陽殺は繭を簀座に一個並にして三日間許も日光に曝らし蛹を殺し、燥殺とは目張せる一室又は土藏内に爐を設け、華氏百四五十度の温度を與へ五時間許も乾燥して燥殺するを言ひ、蒸殺とは蒸氣の温熱によりて殺蛹するをいふ。

其利害――大陽殺は曇天、雨天、暴風等あるが爲に思ふに任せず又大陽殺は繭の水分を失ひ繭質堅きに過ぎて糸繰の際解け難くして手數を增すのみならず、光澤不良となり、糸量の減ずるの恐あり、燥殺は大陽殺に勝る事數等なれども、到底蒸殺に及ぶべくもあらず、第一の手段は蒸殺にあり、今蒸殺の方法を記すべし。

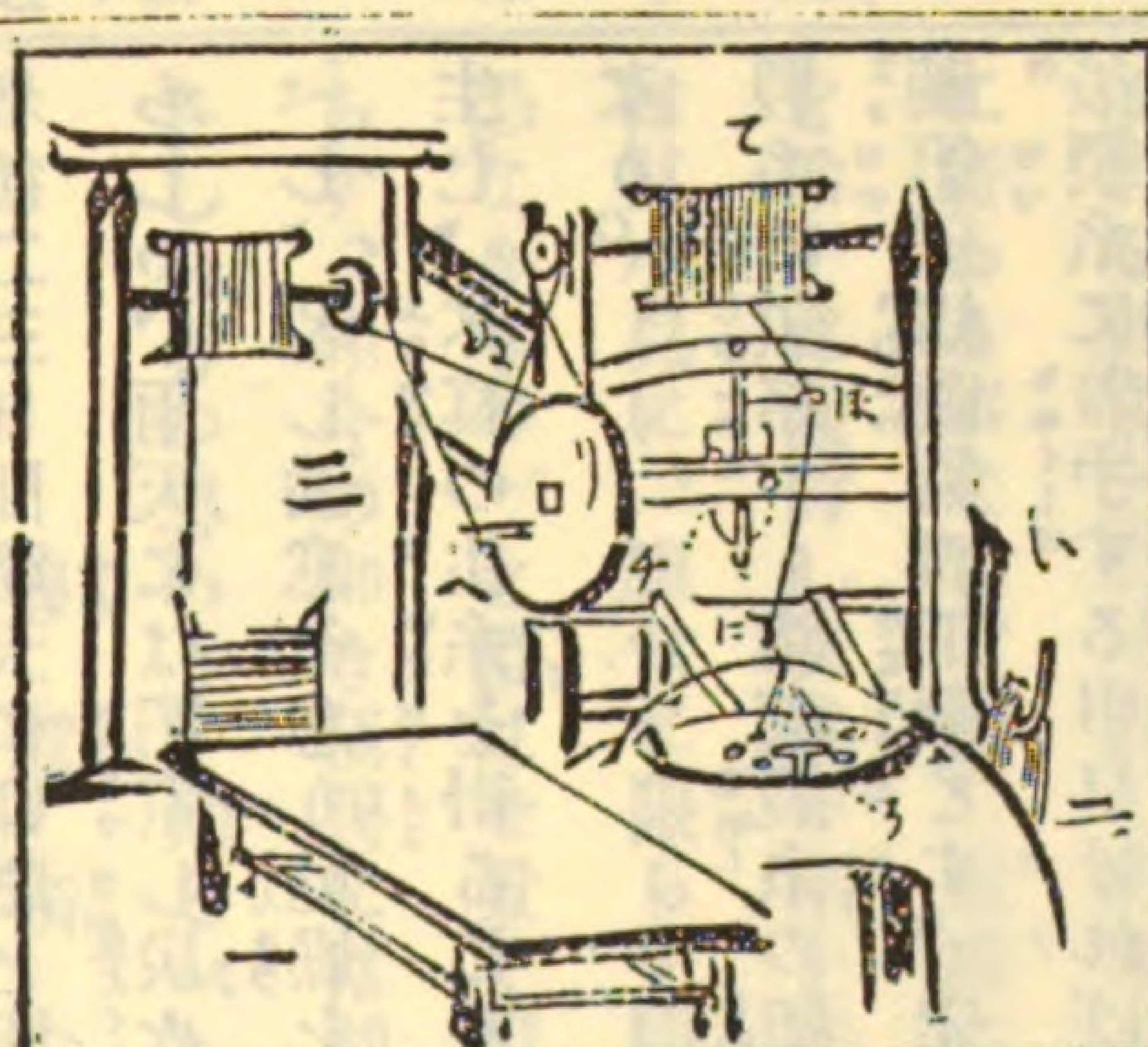
蒸殺の方法――極めて簡略なる蒸殺法は、簾を敷きたる箱、所謂蒸籠に饅頭を蒸すが如くす、或は方三四尺高五尺位にして一側面を自由に外づし得べきやうの箱を造り、內に繭を容れたる籠を挿入るゝ棚段若干を設け、其中に繭を入る、而して竈より蒸氣を通する筧を設け、釜より蒸氣を流通せしむる事大凡三十分にして蒸氣の送入を止め、戸を外づして繭を出し、數分時冷却したる後、繭を貯藏室に持ち行くを宜しとす。

貯藏法――已に蒸殺を終りたる繭は、二三分間冷却せりと雖も、尙ほ蒸氣の爲に幾分か蛹體の水分を增せるゆゑに、最も空氣の流通宜しき室に貯藏すべし、殊に蒸殺後二三日間暗天には窓を開きて空氣の流通を適宜ならしめ、雨天には閉室し炭火を以て少しく温度を與ふべし、若し注意を怠り乾燥を過す時は繭の內部に黴を生じ、不良の生糸を得ることあり、最も注意すべき事なり。

製糸の順序――諸繭製糸の順序は第一薄皮繭第二汚穢繭第三絹繭第四玉繭とす、素より孰れの繭にても成繭後製糸に着手する事早ければ早きほど解舒宜しくの糸の量目多きを得るなり、併し薄皮繭を第一若しくは汚穢繭と同時にするは熟達する養蠶家の爲す處なり、

右の如く利益多くして損害少き二繭の製糸を了らば絹繭に移り、暁くして損害少き玉繭を最後にすべし、此外死籠拾といふものあり、これは絹繭の中より結繭の後、蛹に化せずして死せる蠶兒の繭、蛹殻在中の繭及流腐せるもの丶未だ繭の皮外に見はれざるものが、蒸殺に遇ひて流出せるものとの三種を拾ふを云ふなり、之を識別するには蠶座より一粒づ丶手に取りて振り動かし見るべし、音するものは死籠繭にあらずして音せざるものは死籠なり、死籠繭は座外に投げ出すべし、死籠繭の流れざるもの又は蛹殻のあるものは重くして音せず又は輕くして音せざるを見て識別し得べし、重くして音せざる理由は死蠶兒の繭中に充滿せる故なり、死籠繭を實見すれば青黴を生ずるが如きものあり、劖きて繭内を撿すれば蛹殻或は死蠶を實見し得るものなり。

製糸器具――普通に用ゆるものは圖の如く(一)は糸繰女の腰掛臺(二)は糸繰鍋(三升鍋)(三)は製糸器械と知るべし(い)と(ろ)とは篠竹の一端をさきて鍋縁に挾みたるもの(は)は矢筈(金屬にて製したるもの)(に)は撚懸(岩石類に人の頭髪數十本を後に纏ひたるもの)(ほ)は手振り、これは(へ)の把手を取り(り)なる車を左方に轉せば(り)の心棒に附着せる(ち)の作用により左右に振動し以て糸を(と)の枠の各部に平均に巻かしむ。



製糸器械

洗濯につき

此頃は最も洗濯に適したる時候なり、殊に浴衣等の如き白地のものは汚れ易きゆゑ二三度着すれば直ちに腰の邊は目立つやうになる、主人又は小兒等に汚れたる

衣物を着せ置く時は、他の目よりは其家の細君は甚だ無性のやうに見え、又着用するものも心地能きものにあらず、されば夏の間は衣服洗濯に能々注意し、お三を相手に敵撃の風情にても耻る事なし、襷高く絞り擧げ、洗濯に力を入るべし、それにつきていふべき事あり、先づ第一水を擇むが最も肝要なり、洗濯用の水は鹽分、鐵分、泥分を含める硬水を用ゆるは不可なり、蒸溜水若しくば雨水の如き軟水を用ゆるに如かされども洗濯用水は孰れも多量を要するものなれば、雨水などにて間に合ふまじ、故に一度沸騰せしめたる湯を用ゆべし、左すれば石鹼等も能く湯に溶解して洗濯の效も著しと知るべし、水に鹽分、鐵分、泥分を含む事は、素人には一寸知れ難きゆゑ、先づ成るべくは堀井戸の水をつかはぬが宜し、堀井戸の水は寒冽にして清澄なるには相違なきも、洗濯用水としては甚だ不可なり、斯様なる水に一寸手拭を入れても、いやに固くなり、白地のものは稍泥赤色を呈するに至る、故に白地のものは最も堀井戸の水に浸染するを戒むべし、洗濯には湯が最も適當したるものなれども、わかすのが面倒と思はゞ、場所によりて有無はあれども、水道水か河水を用ゆべし、是等は湯に次きて洗濯物に忠義なるものなり。

社交一斑

流行の栞

夏の流行品

春夢

夏は流行品最も尠く、且つ流行は安物にのみ行はるゝものなれは流行の生命も短きものなり、夏に流行品の尠き理由は、流行品は大低外出用譬へば裝具の如き衣服の如き履物の如きものに多く見受けらるゝものなれども、夏は大低外出するもの十分の一位の割合なれば、勿論流行品も冬より春にかけての季節に比し十分の一位もあるべし、又其

流行も最も變化し易く冬季なれば衣服にしても一期に二三回の流行の傾向を顯はせども、夏は僅に一回の流行品を見るに過ぎず、髪具に於ても然り履物に至ても然り、殊に儀式用のものに至りては流行品皆無と斷言しても差支なし、其故は夏は婚姻祝儀の如きもの、集會、物見遊山の如きもの尠く、僅に月夜に舟を浮べて鳴海絞の袖を涼風に吹かすさいふより外に多くの洒落を見す、夏は何事も手の入らざる簡略なる生活を送るものなれば、おのが好みのまに／＼するが好し、流行を追ふは野暮の極と知るべし。

流行の瑪瑙

目下瑪瑙は頗る流行の勢力を有し、緒〆は申すに及ばず、簪、珠、根掛玉の如き髪具大低瑪瑙の趣味を帶びざるはなく、眞の瑪瑙ならざれば贋物を用ゆるに至れり、眞の瑪瑙は若狹産第一等にして、贋物には練物、吹物等ありて眞物に紛ふこと甚しく一見彼我の差別なきに至る、扨其流行は從來血の走りたるが如く透明なるものなれども、現今の嗜好は不透明(曇のかゝりたる)なるものに移り價も決して低廉なるものにあらず、透明なる瑪瑙は價甚だ低廉にして煙草入の緒〆一個二三十錢位にて買ひ得らる、然し目下の流行品に至りては最上に至りては十金も投せざれば滿足の品を得る能はず、根掛等には珊瑚の惡氣なるに及ばされども、遊味を好む女中達には持て來いの品なり。

草のいろ／＼

本年の秋草は例年に比して發生頗る早く殊に一般に出來宜しく向島白鬚百花園に於ては今度園内に有名なる詩佛碑文の側へ赤白蓮、桔梗、小車、女郎花、菊、白縞芒、煎翁以上を植付け昨今已に咲初めたり又總ての秋草も追々蕾太やかに開きかゝりし分は夏萩、月見草、おさきり草、鳳仙花、浦島草、百合、夏芒、夕顔、朝顔、瓢、鬼灯、雁來紅、ライキヤウ、露菊、ダンドク、大和撫子、紫陽花、井草、又池中には河骨蒲蓮等今正に咲揃ひたるが萩其他一般の七草の出づるは來月中旬と知るべし。

本年の蕣花

蕣花は本年非常の出來にて前年より一週間早く既に咲出たるを以て入谷の蕣屋十三軒は去九日より葭簀を立廻はして何れも夫々飾付けをなせり年一年と入出多く飾付の當日より入谷の町通りは薄暗き頃よりドロ／＼群集し狹き路傍には兩側に種々の飲食店、簪店等の諸露店を張り同所の重もなる丸新(百花園)成山屋、入十、入長を始め何れも上花もの多きを

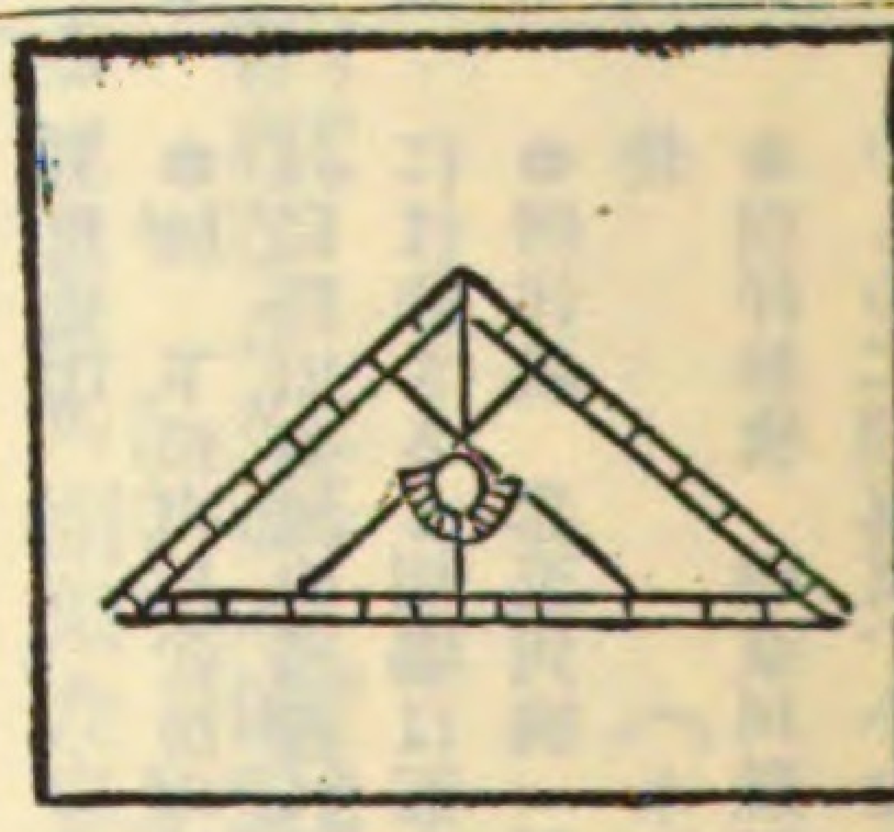
誇り顔に飾立てしが本年之を遣物にする賭入客多く丸新の如きは日々四五百鉢を賣らざるとなしさ同家本年の牡丹咲き大輪ものは「七福葉の亂菊牡丹」此は柿、紅、刷毛目の三種ありて輪の大サ直徑三寸五六分眞に牡丹の亂れ咲きの如し又本年始めて生れたる新花は「モリ葉瞿麥牡丹、雨龍葉牡丹」等にて此外薩摩の大輪ものは數千鉢を仕込たるが旣に半ば賣切りたり中にも蠣殼町邊の米商は之を御華族へ遣物にするため千餘鉢を買ひたりさ此外松本德次郎方は年々蕣花人形を興行せるが本年は一人〆にて已に大船にて仙臺高尾の釣し切り、金玉均銃殺の塲、靑砥左衛門、忠臣藏兜改め、惣吾渡し塲等の人形は何れも人形師武田縫之助の作の俳優似顔人形なり同家には他にあらざる本年瑠璃色の新花を飾付るさ云ふが今十四日より開塲せり

帶留

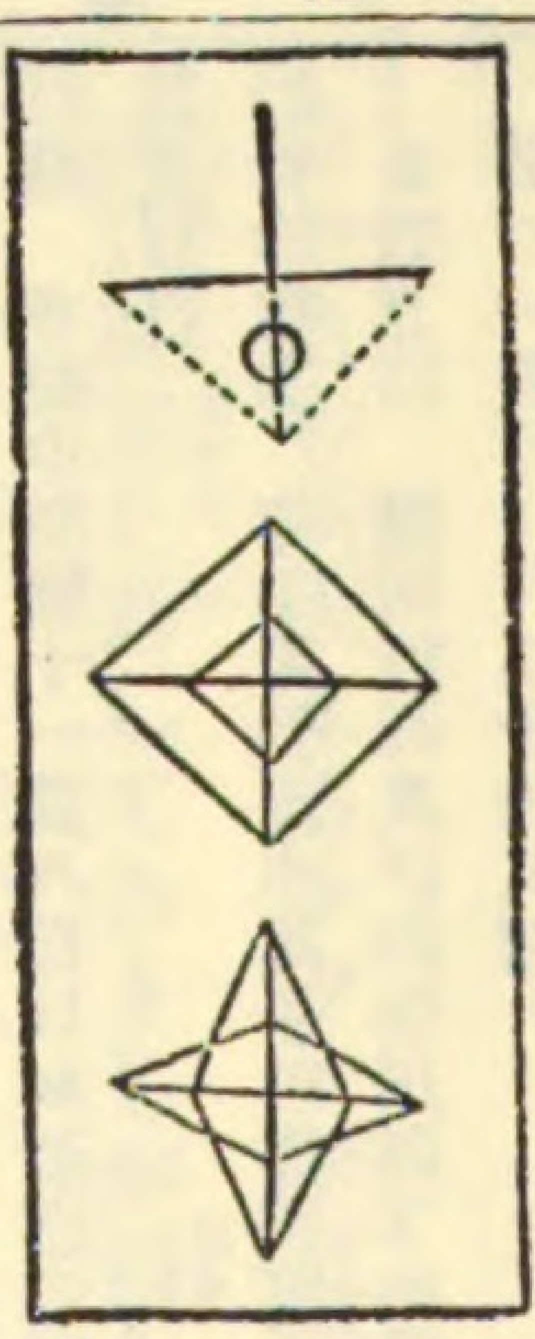
別段變りし事なしさ雖も近來賣出せしは『新相老締』さ稱するものにして、これは過三月九日　兩陛下銀婚御式の時に賣出せし相老締(罷に記載したる)の意匠を承けて工夫したるものなり、夏なれば淡泊なる色にして心無絹打の細打なれば中年增以上の用品さ知るべし。

新式畫板

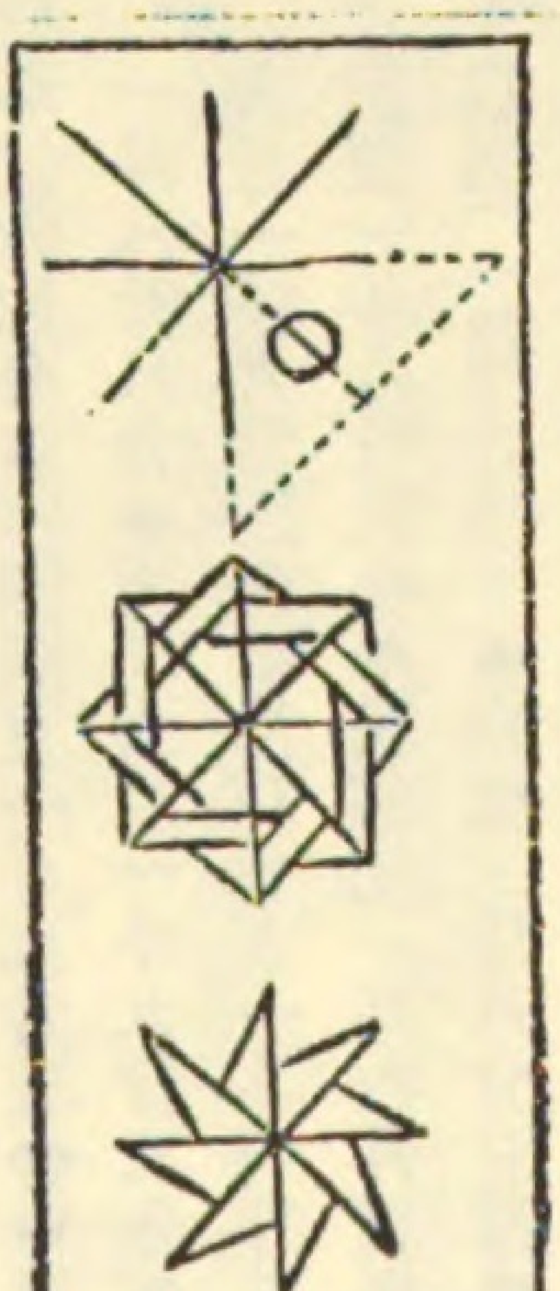
新式畫板は圖畫教育家大原證一郎氏の考按にして上圖の如く其用器具一



切の提携に便なり而して其器具に毀損の恐なく簡便無比のものにして仝氏著用器畫さは離る可らざるものなり且つ其使用法は先つ中央の一線に就て言はんに甲圖の如く縦線を引き其中央に記點しこれに定規の長邊の中央を合せ孔の下に現はるゝ縦線の一部分さ孔の內側に刻したる線の下端さ相接するを認め先の線さ仝長なるものを引けば仝長の縦横線各其正中に於て直角の接合を爲す而するさきは以下に圖の如きものを畫くを得乙圖は甲の方法を以て二線を接合せしめ其接合の處に定規の頂角を合せ割線の孔の內側にある部分の下に記點し長邊の中央を先の接合點に合せ今の記點さ中央の接合點さを貫き以て前さ同長の線を引き亦一方も此の如くするさき



甲圖



乙圖

は四線の正しき交叉を得而するときは以下二圖の如きものを畫くを得丙圖は形の中心線を引き下端より（イトゾコ）の厚さを先づ記し上端に定規の中央を合せ左右全長に上邊を引き次に定規を倒し（イトゾコ）の記點と下端とに同方法を以て左右全長に記し以て三横線を連接すれば求むる處の茶碗或は盃の形を畫き得べし此方法を以てすれば器具の正面圖は容易なり其他此一個の畫板により種々樣々の装叉は圖をゑかく事を得るなり價は二錢より三十五錢迄と聞く

附言　本號は編輯〆切に切迫し充分流行の報道を盡す能はず讀者幸に諒せらるべし

前號流行欄中乳母車の挿圖は大に其意を失せり流行形は彼の如くならず藤製の四輪車なり

日用品物價（七月廿一日）

◎白米小賣相場（一圓に付）●一等白米七升五合●二等白米七升七合●三等白米八升●四等白米八升四合●五等白米八升九合

◎雜穀（一圓に付）●本貫大麥三斗〇●膳塲大麥三斗一升五合●新肥後上小麥一斗九升五合●同麥安二斗二升●新船橋小麥一斗九升五合●新常州小麥二斗〇●新下總小麥一斗九升七合●新千葉小麥一斗九升五合●札入竹林麥一斗七升〇●並一斗八升五合●上割麥一斗八升〇●並一斗九升〇●佐野搗粟一斗五升●南京大豆二斗〇四合●同青大豆二斗〇●同薄色小豆一斗四升三合●同白小豆一斗六升●八戸大豆一斗九升●粕壁薄色小豆一斗二升四合●室蘭黑豆一斗九升五合●日無白さ一斗〇七合●本石上大豆一斗八升八合●南部大豆一斗九升三合●新川越既豆一斗六升五合●釜山大豆一斗九升五合●川越白さ一斗一升五合●本塲平豆一斗六升●北海道鶉豆一斗八升五合●鶴隊元一斗四升吉原大豆一斗八升

◎鹽（一圓に付）●赤穂三俵八分五厘●大鹽并に八家三俵九分五厘●本齋六俵一分五厘●新齋六俵八分五厘

◎砂糖（一圓に付）●稀市三十六匁五分●同次二分●台安二十匁三分方十七匁五分●呂宗二十一匁二分方十九匁●初雪三十匁五分方三十匁●天光二十九匁方八匁五分●黑十八匁八分●同次十七匁五分

◎糠　●越中羽糠十一貫八百目●酒造羽糠十二貫五百目●北海羽糠十二貫五百目

◎青物相塲　昨今青物及水菓子の卸相塲は左の如し

●新甘藷　駿河靜岡及び神奈川縣下平塚邊の薩摩芋の走り昨日市塲に出づ一貫目に付二十七八錢

●新里芋　同靜岡縣下産にて親ヌキにて山量り一升二十五錢

●眞桑瓜　下總物産極上等一本に付一錢二三厘中もの七八厘、下もの五厘位迄

●桃　下總市川近傍の地桃（蜜柑箱入）一函極上等七八十錢、中等五十錢同野田並流山邊産にて上等五十錢を下るものあり本年は左のみ不作には非ざるも相塲は五六年以來の高價なり

●西洋桃　赤玉角桃一個一錢二三厘水光と云ふ種類は大玉一錢五厘位

●西洋林檎　神奈川縣下川崎産西洋林檎赤大玉極上一個三錢五厘より中もの二錢五厘、小なるもの一錢位にて本年は稀なる上出來なり

●モサ瓜　一本に付大八厘、中もの五六厘、小なるものにて三厘位

雜録

笑茸

笑茸とて楓樹の枯枝に四月頃生じ、褐色を帯ひ、形耳の如くして「きくらげ」に似たり。味極めて美なれども毒ありて、中毒すれば食後五六時間を經て發症し、大概二十四時に終る。其經過中は言語應答通常なれども、惡心嘔吐を催し、一種痙攣性の笑を來し、自ら底止する所を知らず、甚しきは爲に腹筋痙縮して腹痛を發するに至るとなり。

蔓陀羅草

靜岡在の有渡郡長田村に德願寺といふ寺あり。住職某此の春遠州の知己より草葉の種子を贈られし故、之を蒔置きしに、青々と生ひ出で如何にも軟かげなれば、これなん西洋の野菜なるべしと、去る十二日漬ものにして雛僧四人と夕飯の膳に上せける。然るに不思議や三十分も立たぬに五人の顏色土の如く、吐くもあり、狂ふもあり、慣るもあり、笑ふもあり、狂態百出名狀すべからず。翌朝寺男來り見て大に驚き、遂に大騷ぎとなり、村人醫師等集り見しに、庖廚に蔓陀羅草(てうせんあさがほ)の漬し物の殘りあり、初めて其中毒なりとわかり、早速治療せし故、命には別條なかりしと。

博愛

(ホワード夫人)

無一生

有名なる英國の博愛家ホワードが連添ひし夫人と云へるは世に所謂似た者夫婦との俚諺に洩れずしてオサ〳〵所天に讓らざる優に柔しき慈善の心に富めるぞ有難き

一日夫人の所天なるホワードは或人に對する貸借上の決算勘定を爲してありしが圖らずも自個の方に豫想外の得分の立つを發見しけるにぞホワードは直樣夫人を顧みて逐一右の次第を語聞えし末件の金額を以て都府龍動へ保養に出懸ける費用に充てゝは如何にと發議しけるが當下夫人は所天の言葉を打消し「否とよ吾儕夫婦の者が龍動へ遊山に行くために費す丈の金額を以てしたらんには不樂しく世を送る貧しい一軒の家族の

ために何程立派な小屋が建てらるべきに」と是れなん博愛なる夫人が所天に答ふる微妙じき言葉なりしがコノ健氣にも亦殊勝なる夫人の忠言に尋常ならぬ所天なるホワードは翻然として感悟し龍動旅行のことは遂に斷念しけるとかや噫善行は旅行の快樂に勝るなり

阿若

《口繪の繪解き》

復讐を以て道德の第一義としたる封建時代に於て、曾我の復讐に次ぎて最も人の賛美を博したりしは、日野阿若の復讐なりき。

阿若は中納言資朝の子、後に邦光といひて官中納言に進みたりし人なり。

父資朝は後醍醐帝の陰謀に參して北條氏を滅さんとし、事露れて佐渡に流され、本間山城入道の家に監せられぬ。時に阿若年十三なりしが、之を聞き、往て父を見んと欲しつゝ、母の止むるをも聽かで千苦して海上四十五里の佐渡に行きける。

佐渡に到りて父を見んことを請ひしに、山城入道も其孝心を感じたれども、北條氏への聞えを憚りて許さず、遂に資朝を討ち果しければ、阿若之を恨みて、仇を報ぜんと欲し、病なりとて本間の家に止まれり。

一夜、雷雨晦冥なりき。阿若以爲らく機失ふべからずと。因て密に入道の寢所に入りて之を窺ふに、入道はあらずして弟三郎臥せり。三郎は父を斬りしものなり。乃ち直に入らんとしたりしに燭光明にして、窓外蛾あり。少しく窗を開くに群蛾入て燭を滅しければ、是に於て突入して之を刺し、修竹に攀ぢて濠を超へ去りける。

時事一斑

德育を本とすべし

井上文部大臣七月九日東京工業學校の卒業式に臨て演說して曰く、實業敎育は殊に德育を以て本とすべし。何故に實業敎育は德育を本とすと云ふか、今の時に當り、幼稚なる實業を振興して一世の公益を起し、國家經濟の源流を啓發せんとする者は、其事業の大小に拘らず、必や正直剛毅又清廉潔白にして世の信用を得るの人ならざるべからず。若し此貴重なる德義の一を缺き、腐敗臭汚の分子をして一たび實業技術の社會に浸入するを許すことあらば、實業敎育は忽にして其の勢價を失ふのみならず、從て進步に向ふ處の諸般の實業も亦俄に退轉の色を顯し、終には救ふへからざるの有樣に陷らんこと鏡に掛けて見るが如しと。

是れ大に然り。實業敎育は或意味に於て爭利の修練なれば、かたく其基礎を德育に置くにあらずんば、其弊直に生ぜざる能はざるべし。

學成て人老んと欲す

小學を卒へ、尋常中學を卒へ、高等中學を卒へ、大學を卒ふ。學成て已に少壯有爲の時期は過去に屬するの歎なき能はざりしもの、帝國大學卒業者の有樣なりき。

明治廿二年より同廿六年に五年間の帝國大學卒業者平均年齡は、實に斯くの如し。頃者高等學校令出てゝ、學校の生涯永ふして實行の生涯促なるを救はんとせしも、之が爲めなるべし。

分科	五箇年平均
法科大學	二十五年四箇月餘
醫科大學	二十六年三箇月餘
工科大學	二十四年九箇月餘
文科大學	廿四年十一箇月餘
理科大學	二十四年八箇月餘

農科大學	二十四年五箇月餘
六分科大學總人員に就ての平均	二十五年六箇月餘

學政研究會

小學敎育費國庫補助其他緊要なる敎育問題を研究し其遂行を期するてふ名に由て、伊澤修二氏等の學政研究會成れり。

日本の花嫁

七月三日より六日に至る日本基督敎第九回大會は、有名なる『日本の花嫁』の著者田村直臣氏が基督敎師の職を剝奪したり。該著者は日本國民を侮辱し、且つ斯る著述は基督敎敎師の爲すべき所に非ずといへる理由を以て。

而して峻峭なる內村鑑三氏は之を評して、田村氏の所行に類する所爲は外國人の好意を求めんと欲する我國人の屢取りし所、資本募集の爲に彼國に赴きし者にして彼の落入りし誘惑に會せざるものは殆んどなかるべしとて叫べり。

「花嫁事件」を以て舊來の哀訴的運動の最終たらしめよ。以來は歐米人の婦女的感情に訴ふるを廢して、其義俠豪雄に訴へしめよ。若し故さらに同胞の辱を暴らすにあらざれば今日の敎會幷に學校を閉鎖せざるを得ずとならば、余輩は返つて其閉鎖するを喜ぶものなり。基督敎は精神なり、此無氣力、無精神、屈辱、軟弱を以て斯敎を維持せんと欲す、自欺之れより大なるはなし。哀訴に依て建ちし敎會、屈辱を以て成りし學校、是等が磨滅せざる間は眞正の基督敎は我國に建設せられざるなり。

而　し　て

日本基督敎大會に交渉すべく集りたる共議外國宣敎師大會は、議決して、田村氏の行は不道德の事と思はず、從て敎職を免すべき理由なしと信ずとし、大會の擧動を以て愛と公義との道に遺憾とする所ありとなし

たり。同教徒間に於ける内外人の、感觸に衝突せると一日にあらず。而して今や之を形迹に顯はさんとす。自主的意見の何事にも採用せらるゝ今日、世に日本的基督教の成立を謀るものあるも蓋し必然の傾向なるべし。

思想界の一顯象

基督教の革新を稱道する増野悦興氏は、基督教の根本的教義を數へて四要件を擧げたり。

曰く、人の靈性　人は靈性を有するものゝ有すべき自覺自決の二力を有す。

血肉は一新し思想は變遷すれども、吾人は自覺によりて我は依然たる我なるを認む。自覺するは不易なるが故なり。唯不易なり、故に不死なり。唯不死なり、故に靈魂は不朽なり。

或事をなし或事をなさゞらんとするに、吾人は自決によりて其行爲を撰擇するを得、自決なるは自由なるが故なり。唯自由なり、故に責任あり。唯責任あり、故に人に道德あり。

曰く、神の靈性　神は物力に非ず、理法に非ず、天地萬物を總合したるものにも非ず、活きて心あること吾人人間の如きものなり。

曰く、人と人との兄弟的關係　人類は皆兄弟なれば、階級の上下を問はず、國の内外を別たず、人種の異同を論ぜず、博愛の則に由て相睦み、正義を踏んで相濟すを要す。

曰く、神の國　世界は進歩するものなれば、結局神の國たるに背かざる狀態に到達すべし。

故に徒に後生願ひに陷らずして、亦現世を重んぜざるべからず。

而して彼は基督教徒たるの資格を、此の四要件を承諾すれば足るとなしたり。其言に曰く、

基督教に於て信仰と云へるは、以上の四大原理に現

る丶大主義を全心を以て受くる事なりと。且つ彼は舊神學に於て基督教徒たるに必要の資格としたりしもの丶中、其實要素にあらずとなせるものを擧げて斯く言へり。

一、三位一躰の教理。

二、聖書は神の直接啓示する所に係れる一點誤謬なき寶典なりといふ教理。

三、耶蘇は神なりと云ふ教理。

四、聖書中に記載したる奇跡は、悉く實際ありたる事なりといふ教理。

五、耶蘇は父無しに生れたりといふ教理。

六、耶蘇の十字架上に死せしは、直接人間の身代りの爲めなりといふ教理。

七、死後には悔改の機會なしと云ふ教理。

八、肉躰の甦るといふ教理。附たり聖書に記す耶蘇は死後三日目に甦りたりといふ記事は實なりとの事。

九、罪人か來世に於て受くる刑罰は無限なりといふ教理。

十、天使惡魔などいふもの實際居るといふ教理。

十一、始祖亞當の犯したる罪の罰を子孫が引受くるといふ教理。

記者曰く、此くの如きは、豈に學說と相容るべく、世の進歩と相伴はしむべくなさんとする者に非ずや。亦以て我思想界に於ける潮流の一種が如何なる方向を指し去るかを察すべし。是れ最近思想界の一顯象なり。

郡司大尉

郡司大尉は十九日歸りて京に入れり。功業未だ成らず身先づ歸る。大尉の苦心想ひやるべし。斷ふに大尉の歸京は再び北征すべき用意の爲めにあらざるなからんや。

支那人根性

東都築地入舟町に寓する清國人隆珍愈西洋洗濯を業とす。彼は掃溜に棄てたる魚骨野菜の屑は勿論猫鼠の死骸までも拾ひ來て食料に充て、烟草の吹殼の如き之を最も珍重し、而して半片の反古紙一本の釘折れも之を與ふれば地上に拜跪す。人呼で乞食珍愈といふも恥る色なし。斯ること五年にして國に歸らんとするや、貯ふる所實に一千三百餘圓。

又チーパを周旋する林昌吾あり。鑢を以て其受け渡しする銀貨の端を削り、五年にして鑢粉五百三十目を得、賣りて七十三圓五十錢を得たり。

感すべしといへば感すべくもあり、驚くべしといへば驚くべくもあり、恐るべしといへば恐るべくもあり、憎むべしといへば憎むべくもある。



女子慈愛館の設立に關して
博愛義俠なる兄姉に訴ふ

社會的事業として最も憂ふべきもの醜業婦問題の最も憂ふべきより憂ふべきは莫く、之を救濟するに最も困難なるもの亦醜業婦救濟の困難なるより最も困難なるは莫し。彼等は恥を世界到る處に曝して我が國民の躰面を害するのみならず、日本婦人の品格を下し、國家の元氣を消耗し、社會の不健全不道德不經濟不名譽の因由をなし罪惡の媒介をなすと、今之を説述するまでもあらず。故に今日の急務は其非の如何に恥辱にして如何に不頁なるかを議し、如何に之を救濟すべきかを論ずるのみに止まらずして、如何に之が救濟を事實にすべきかを講ずるに在り。我等が此の慚ち且つ賤むべき境涯に陷らんとし及び已に陷りたるを後悔するもの丶爲めに、こゝに彼等の一職業學校たる女子慈愛館を設

立せんと欲するもの蓋し偶然にあらざるなり。

女子慈愛部は、彼等を正業に導くべく、養蠶製絲裁縫刺繍造花若くは菓實の植付等の如き婦人にしてなし得らるべき業務を授け、且つ其販路を開き、以て彼等を自活の途に就かしめんとするものなり。

幸に已に賛成の意を表するものあり、且つ我が婦人矯風會の事務所建築費として有志者の寄附を得たるもの數百金あるを以て、則ち目下の急務たる此の醜業婦の爲めの職業學校と將來の矯風會事務所と倚なすべき幾多の慈善事業とに供すべく、城北大久保を擇んで已に一千八百圓の地を見付たり。然れども我等が今正に手にせる所は數百圓のみ。未だ以て其成功を見るに足らず。

博愛義俠なる紳士淑女よ、冀くは我等が志の在る所を察し、我等の微力を助け、一日も早く此の矯風事業を成さしめよ。獨り我等が幸のみにあらざる可し。

日本婦人矯風會

義捐金は左の所にて取扱申候

東京市京橋區日吉町國民新聞社。
東京市京橋區彌左衛門町新朝野新聞社河村淳。
東京市麹町上二番町女子學院内婦人矯風會事務所。

一金八百五十六圓五錢　基金
（内三百圓買入地所保證金として入る）
一金二十五錢　菅又熊之助
一金二十五圓　ミセス、ツルー
一金百圓　在日本外國婦人會
一金五圓　日本基督教會内婦人會
一金四十錢　山川みち子



再版

家庭叢書第一卷 家庭の和樂

定價拾錢郵稅二錢

本書に對し已に發表せられたる天下の公評は左の如し

民友記者我邦家庭の爲めに努むると漸し先には家庭雜誌を發行し今亦た家庭叢書なるものを出版す此書は其の第一卷たり記事引例共に簡易にして婦人小兒にも解し易からしむ、努めて懈らずんば其の家庭の品格を高くし平和を增し且つ康樂と祝福とを來すこと必らず少なからざらん（報知新聞）

是れ專ら平民主義の風儀を家庭の奧までも實施演行せんとする民友社一流家庭叢書の一として新たに版行せられたる袖珍平易の冊子にして家庭の和樂を望む女派の人々先つ一讀して可なり（二六新聞）

此書は我邦家庭の品格を高うし家庭の平和を增加し家庭の康樂と祝福とを多く來さんが爲めに世に介せられたるなり左れば是れより健全なる而も和樂に滿されたる家庭を形ち作らんとする者は勿論無味蠟を嚼むが如き反目敵味方の如き猜忌異宗の如き一口に云へば敵同士の集りの如き家庭は此を讀んで其の弊竇を洗滌すべし傍訓つきなれば婦人先づ第一に讀んで次でうちの人にも讀んで貰ふべし（大坂每日）

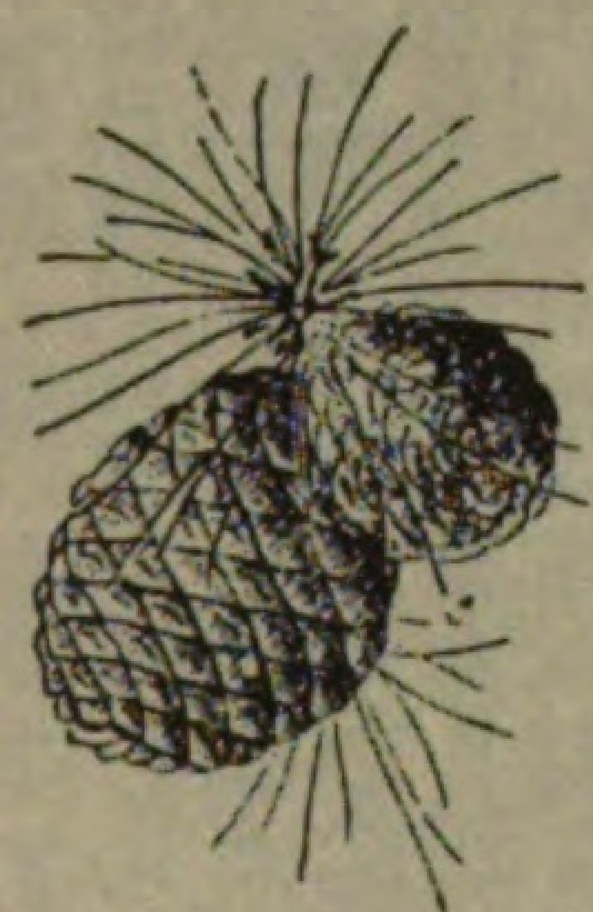
民友社より新に發行する「家庭叢書」の第一卷にして彼の「平民叢書」と形を同うせる小冊子なり、例の平易なる文章をもて健全なる家庭を作るの法を說く所、民友社の獨得也、思ふに平民の友といふ平生の主義に背かず孜々として社會改善の方法を講ずるの誠意及び其の手段の宜しきを得たるは、方今民友社を第一とすべし、此の書に說く所もとよりコンモンセンスたるに外ならねど其のコンモンセンスたる所すなはち其の健全なる所なり、吾人は此のフランクリン的敎誨の彌〻いでゝ彌〻深切ならんことを希望す（早稻田文學）

例の平民的口調を以て平易に綴れる小冊子なり家庭道德頽廢せる今日に在りては聊か改與の一助たらんか（國會）

家庭叢書の第一卷として、發兌せられたる一小冊なり。『家庭の品を高くし、家庭の平和を增加し、家庭の康樂と祝福とを多く來さんが爲めに候』と德富猪一郎氏が緒言に在るが如く、實に我國の家庭に切要なる新著なり。書中記する所、驕奢を誡め、節儉と力行とを勸むること、最も周到にして、家々の內君を益すること大なるべし。借金を積みつゝ外見を飾るは、一般の風ともいふべき有樣なる今日、かゝる書を繙きては、我ながら此炎天に腋の下より冷汗を漲さゞる內君家宰は幾人かあるべき。唯恨むらくは此書も例の民友社流の筆法なれば、僅に高等小學校の卒業位の家庭の婦女子には解す能はざるべきを。（少年園）

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

明治廿五年九月十四日逓信省認可



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行